

## 地主と虐殺

—インド・ビハール州における私兵集団の結成と政治変動—

中 溝 和 弥\*

### Landlord and Massacre: The Formation of Ranvir Sena and Political Change in Bihar, India

NAKAMIZO Kazuya\*

Why and how do violent conflicts happen in a stable democracy? India, the motherland of non-violence movements, has experienced numerous violent conflicts like religious riots, caste riots and class struggles since Independence. Especially after 1980's, the extent of violence has risen up drastically as Ayodhya-related riots and Naxalite-related violence. How can we explain these violent conflicts in the 60-year experience of "The world's largest democracy"?

This paper focuses on the formation of Ranvir Sena, which was set up by Bhumihar landlords in 1994. Ranvir Sena, which is the most organized and brutal private army in Bihar's Post-Independence history, provides an important case to analyze the relationship between democracy and violent conflicts.

One important variable to explain the emergence of militia is the "democratization" in Bihar. The traditional dominance of upper castes in rural society has declined decisively by the political change in 1990 onwards, which led to the formation of Ranvir Sena. Simultaneously, though, the case of Ranvir Sena indicates that the institution of democracy has the capacity to absorb once uncontrollable violent elements and gradually overcome the chain of violence.

#### 1. はじめに

民主主義国家における私兵集団の暗躍を、どのように捉えればよいだろうか。国家の統制が及ばない武装集団に関する先駆的な研究で知られるホブズボームは、著書『盗賊 (Bandits)』を初版から30年経過した20世紀末に改版する理由のひとつとして、盗賊が存在しうる歴史状況が読者にとってより身近になったことを挙げている [Hobsbawm 2000: x]。世界の多く

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2009年11月27日受付, 2010年1月22日受理

の地域において、国家や行政機構の急速な崩壊がみられ、十分に統治機構を発達させた国家でさえ、「法と秩序」の維持能力を著しく低下させている、と観察できるためである。たしかにホブズボームの指摘するように、武装集団の暗躍は、いわゆる破綻国家に限られた話ではない。

インドは1947年の独立以来、1975年から77年にかけての2年弱の短い期間を除き、民主制を実践してきた。近年の民主化にみられるように、権威主義体制を経験した国が多い途上国のなかでは、稀有な存在である。民主制の確立には、植民地期の経験、すなわちマハトマ・ガンディーが主導した非暴力主義に基づく大衆運動と、これに譲歩したイギリスが導入した制限的な議会制への参加が貢献したと考えられるが、非暴力主義によって生まれた国でありながら、独立後の歩みは暴力とは決して無縁ではなかった。とりわけ1980年代以降、犠牲者が千人を超す宗教暴動が繰り返される一方、暴力革命を掲げる左翼過激派と政府の暴力的対決は現在もなお続いている。英領時代に植民地政府が手を焼いたダコイト（Dacoit）と呼ばれる盗賊集団の活動も、独立によって解消されたわけではない。<sup>1)</sup> 紛争を非暴力的かつ制度的に解決することが民主主義の重要な機能のひとつであることを考えれば、「世界最大の民主主義」という自賛も空しく響く。

なぜ、安定した民主制の下で、暴力的な対立が起こるのか。宗教・カースト・階級アイデンティティに基づく暴力が、これから検討するように1990年代以降のインドにおいて増加したのはなぜなのか。暴力の増大と民主制の実践はどのように関わっているのか。これらの問いを考えることが本稿の目的である。

対象として、ビハール州における地主の私兵集団を取り上げたい。広いインドのなかで「病氣州」と揶揄されることもあるビハール州は、貧困とともに暴力で知られる州である。歴史を遡れば、途方もない犠牲を生み出したインド・パキスタン分離独立の前年1946年には、カルカッタを起点として始まった大宗教暴動の連鎖のなかで、ヒンドゥー農民大衆がムスリム7,000人以上を虐殺した。<sup>2)</sup> 独立後も、1980年代まで宗教暴動は続く。最も大規模なものが、1989年下院選挙直前に起こったバーガルブル暴動であり、ムスリムを主とする1,000人を超える住民が虐殺された。1990年代の政治変動を引き起こす契機となった暴動であり、現在でもなお人々の記憶に新しい。<sup>3)</sup>

ビハール州において1990年以降、宗教暴動が下火になったのとは対照的に、カースト・階

1) 現代の盗賊であるプーラン・デーヴィー（Phoolan Devi）を取り上げつつ、近現代インドにおける盗賊の歴史を「合法と違法の間」という視点から理論的に分析した優れた研究として竹中 [2009a, 2009b] を参照のこと。

2) 当時ビハールを視察したネルーは、「狂気が民衆を捉えてしまった」とおののき、「今、私が見いだした真実は、連盟（ムスリム連盟：筆者註）指導者がこれまで批判してきた事態と全く同様、いや、それ以上に悪い」と嘆いた。サルカール [1993: 585] を参照のこと。

3) 詳細については、中溝 [2008a] で論じた。暴動が政治変動に与えた影響に絞った要約として中溝 [2009b] を参照のこと。

級アイデンティティに基づく暴力的対立は増加した。農村における虐殺事件自体は、後述のように1990年代以前より全国に知られていたが、規模・件数とも1990年代に入り増加する。とりわけ、1990年代半ば以降、ランヴィール・セナー（Ranvir Sena）と称する私兵集団が暗躍し、約300名の貧農を殺害してきた [Kumar, A 2008: 188, Table 8]。なぜ、このような現象が起こったのか。なぜ、どのように、ランヴィール・セナーは誕生したのか。本稿においては、ランヴィール・セナーの誕生に焦点を当て、民主制の下での暴力について考えてみたい。

## 2. ビハール州の社会経済構造

ランヴィール・セナーについて検討する前に、ビハール州の社会経済構造を最初に説明しておく必要があるだろう。表1は、ビハール州における社会集団の構成を示したものである。

ヴァルナ階級の観点からは、最上層にバラモンを頂点とする上位カースト、次に後進カーストが続く。後進カーストという名称は、上位カーストと比較して、社会・経済的に遅れて

表1 ビハール州における社会集団構成

カテゴリー	カースト	総人口比
上位カースト	バラモン (Brahmin)	4.7
	ブミハール (Bhumihar)	2.9
	ラージプート (Rajput)	4.2
	カヤスタ (Kayastha)	1.2
上位カースト総計		13.0
上層後進カースト	バニア (Banias)	0.6
	ヤーダヴ (Yadav)	11.0
	クルミ (Kurmi)	3.6
	コイリ/コエリ (Koiri/Koeri)	4.1
上層後進総計		19.3
下層後進カースト	下層後進総計	32.0
後進カースト総計		51.3
ムスリム		12.5
指定カースト (ダリット)		14.4
指定部族		9.1
合計		100.0

出所：Blair [1980: 65, Table 1] より筆者作成。

注1) Blairは、ベンガル語話者(2.5%)を組み入れない場合の比率と組み入れた場合の比率の2種類を作成しているが、本表では前者を採用した。

注2) 「上層後進カースト」カテゴリーに該当する「コイリ (Koiri) /コエリ (Koeri)」カーストには、表記のように2つの呼称が存在する。ブレアは「コイリ (Koiri)」としているが、他の文献では「コエリ (Koeri)」とされることが多いことから、本稿においては「コエリ」で統一することとする [Blair 1980]。

いる現実によ来する。ただし、後進カーストとはいっても、全インドレベル、ビハール州レベルの双方において人口の過半数を占める規模の大きさから、内部に格差が存在する。ビハール州においては、他の後進カーストと比較して政治・経済・社会的に優位に立つバニア、ヤーダヴ、クルミ、コエリの4カーストを上層後進カーストと分類し、それ以外のカーストを下層後進カーストと区分している。その下に、最下層となる指定カースト、指定部族が位置する。<sup>4)</sup>

人口比としては、上位カーストは合計で13%であるのに対し、後進カーストは、前述のように合計で51.3%（内、上層後進カーストは19.3%）と過半数を超えている。指定カースト、指定部族は合計して23.5%となる。後進カーストをひとつの集団と考えると、ビハール社会における最大集団となる。

次に、カーストと階級の関係について示したものが表2となる。

表2によれば、上位カーストの9割以上が「富農・地主」に該当し、上位カーストと地主階級がほとんど重なることがわかる。後進カーストは上層後進カーストと下層後進カーストに区分されることは前述したが、上層後進カーストは3割強が「富農・地主」、2割弱が「中農」に該当するものの、5割強は「貧農・貧中農」となる。下層後進カーストになると「貧農・貧中農」が9割に迫る率となる。指定カーストに至っては96.5%が「貧農・貧中農」に該当し、下層後進カースト・指定カーストと「貧農・貧中農」階級を同一視できる状況となる。

「中農」は家族経営主体の自作農、「貧中農」は自作農と小作、「貧農」は農業労働者におおよそ該当すると考えられるので、カーストと階級の関係については、大まかに上位カースト＝地主、後進カースト＝自作農兼小作人、指定カースト＝農業労働者という対応関係が存在するといえる。以上が、ビハール州の社会経済構造の概要である。

表2 ビハール州におけるカーストと農地所有の関係（1980年）

	上位カースト	上層後進カースト	下層後進カースト	指定カースト
貧農・貧中農	7.9	51.8	89.5	96.5
中農	0.7	17.5	2.6	1.5
富農・地主	91.4	30.7	7.9	2.0

出所：Prasad [1989: 104, Table A]

注) 数値は%表示。貧農・貧中農、中農、富農を区分する具体的な基準については、言及がない。

4) 「指定カースト (scheduled castes)」とは、「不可触民 (untouchable)」を指す行政用語である。不可触民はヒンドゥー社会の最下層に位置し、苛酷な差別を歴史的に受けてきたため、インド憲法は不可触民制の廃止を17条において定め、不可触民カーストを具体的に指定し保護の対象とすることとした [Majumdar and Kataria 2004: 33, 280-286]。それゆえ、行政上は「指定カースト」と呼ばれ、議員職、公務員職、教育機関等に留保枠が設定された。山岳地帯に主に居住する部族民も同様に保護が必要であると考えられたため「指定部族」として特定された。

### 3. ビハール農村における私兵集団の展開と虐殺

#### 3.1 私兵集団の展開

それでは、このような社会経済構造を有するビハール州で誕生したランヴィール・セナーとは、何か。簡潔には、上位カーストであるブミハールの地主によって結成された私兵集団である。ランヴィールとは、19世紀に存命したとされるランヴィール・チョードリー (Ranvir Choudhary) という人物の名前であり、セナーはヒンディー語で軍隊の意味であるから、字義どおりには「ランヴィールの軍隊」となる。ブミハールに属したランヴィール・チョードリーは、後に検討するランヴィール・セナー発祥の地ベラウル村の出身とされ、一帯で権勢を振っていた同じく上位カーストのラージプート地主に対抗して戦ったと伝えられる土地の英雄である [Louis 2000: 2209-2210; Kumar, A 2008: 129]。ランヴィール・セナーは、100年以上前の英雄に正統性を求めたことになる。

ランヴィール・セナーは、前述のように数多くの貧農を虐殺してきた。しかし、ランヴィール・セナーが、ビハール史上初めて出現した私兵集団ではない。表3からわかるように、地主の私兵集団自体は1970年代後半から出現している。

興味深いのは、1990年を境に私兵集団の構成が明確に変化したことである。1980年代までは上位カースト地主の私兵集団も上層後進カースト地主の私兵集団も入り乱れて存在したのに対し、1990年代になると上層後進カースト地主の私兵集団は姿を消し、上位カースト地主の私兵集団のみが活発に活動するようになる。とりわけ1994年以降はランヴィール・セナーの独壇場である。

それでは、ランヴィール・セナーと他の私兵集団は何が異なるのか。主に3つ指摘できる。第一に、他の私兵集団が特定カーストの利益を代弁すると主張しているのに対し、ランヴィール・セナーは、カーストを横断した全ての地主階級の利益を代弁する点である。<sup>5)</sup> ランヴィール・セナーの司令官 (commandar) として虐殺を指揮したブラフメシュワール・シン (Mr. Brahmeshwar Singh) は、農民 (キサーン) を救うためにセナーを結成したと述べ、ブミハールの私兵集団であることを否定した。<sup>6)</sup> 実際のところ、構成員の大部分はブミハールに属しているが、初期にはブミハール以外の上位カーストからも資金援助を受け

---

5) ランヴィール・セナーを、「全カーストの地主階級の傘」にしようとした試みについて、Singh, A. [1997] 参照。Sengupta [1997] も、ランヴィール・セナーの特徴を、カーストにかかわらず全ての地主の利益を代弁するものとしている。

6) ブラフメシュワール・シンへのインタビュー (2002年11月5日)。彼は逮捕されていたが、体調を崩していたためパトナ医科大学刑務所クォーターに移送されており、インタビューはパトナ医科大学で行なった。ブラフメシュワール・シンは、ランヴィール・セナー司令官に就任するまでは、セナー発祥の地ベラウル村の隣に位置するコピラ村の村長を務めていた。

表3 ビハール州における私兵集団

名前	所属カースト	結成年	活動県	活動状態
クエール・セナー (Kuer Sena)	ラージプート	1979	ボジョプール	消滅
キサーン・スラクシャ・サミティ (Kisan Suraksha Samiti)	クルミ	1979	パトナ/ ジェハナバード/ガヤ	消滅
ブーミ・セナー (Bhumi Sena)	クルミ	1983	パトナ/ナワダ/ ナーランダ/ ジェハナバード	消滅
ロリック・セナー (Lolik Sena)	ヤーダヴ	1983	パトナ/ジェハナバード/ ナーランダ	消滅
ブラフマルシー・セナー (Brahmarshi Sena)	ブミハール	1984	ボジョプール/ジェハ ナバード/ オーランガバード	消滅
キサーン・サン (Kisan Sangh)	ラージプート/ バラモン	1984	パラマウ/オーランガ バード	消滅
キサーン・セヴァ・サマージ (Kisan Sevak Samaj)	ラージプート	1985	パラマウ/オーランガ バード	消滅
サンライト・セナー (Sunlight Sena)	パターン/ ラージプート	1989	パラマウ/ガヤ/ ガルワー/ オーランガバード	ほぼ消滅, 残党生存
サヴァルナ・リベレイション・フロント (Savarna Liberation Front)	ブミハール	1990	ガヤ/ジェハナバード	消滅
キサーン・サン (Kisan Sangh)	ブミハール	1990	パトナ/ボジョプール	消滅
キサーン・モルチャ (Kisan Morcha)	ラージプート	1989- 1990	ボジョプール	消滅
ガンガ・セナー (Ganga Sena)	ラージプート	1990	ボジョプール	消滅
ランヴィール・セナー (Ranvir Sena)	ブミハール	1994	ボジョプール/パトナ /ジェハナバード/ ロータス/ガヤ/ オーランガバード	活動中

出所：Louis [2002: 228-229, Table 8.5]

たといわれている。<sup>7)</sup>

第二に、組織である。他の私兵集団は組織といっても存在が疑わしく、犯罪者の吹き溜まりのようなものであったのに対し、ランヴィール・セナーはしっかりした組織もっている。諜報の情報によれば、専従活動家は約180人おり、15の部隊に分かれて活動を展開していたとのことである。彼らには月給も支給され、保険も完備されているという。<sup>8)</sup>

第三に、活動期間の長さである。他の私兵集団が、虐殺事件を2、3件起こして2、3年で解

7) 『ヒンドゥスタン・タイムズ』(The Hindustan Times) 紙記者サンジャイ・シン氏 (Mr. Sunjay Singh) に対するインタビュー (2002年10月29日：パトナのオフィスにて)。

8) 上述サンジャイ・シン氏に対するインタビュー。月給・保険については、Louis [2000: 2210] が、月給1,200ルピー、1件の襲撃につき1人あたり10万ルピーの保険が掛けられていると報告している。

散するのに比べて、ランヴィール・セナーは起こした虐殺の件数・犠牲者も、活動期間もはるかに規模が大きい。際立つ残虐性が大きな特徴といえるだろう。

### 3.2 農村における虐殺

これら私兵集団は、どのような虐殺事件を起こしてきただろうか。ビハール州農村部における虐殺が全国に知られる契機となったのは、1977年5月にパトナ県ベルーチ（Belchi）村で起こったベルーチ村虐殺事件である。上層後進カーストであるクルミ地主が主として指定カースト農業労働者を11名殺害した事件は、1977年3月下院選挙で敗北し下野したインディラ・ガンディー前首相が視察したことによって、全国の関心を集めた。<sup>9)</sup>

ベルーチ村虐殺事件以後も低カースト貧農の虐殺事件は継続して発生したが、1990年代に入ってから死者数は激増した。1976年から1989年間の14年間に215名が殺害されたのに対し、1990-2001年の12年間には456名が殺害され、犠牲者は倍増した [Louis 2002: 234, Table 8.7, 242-246, Table 8.8]。報道でも1971年から1990年までの20年間で主要な事件が24件発生し約200名が殺害されたのに対し、1990年から99年までの10年間では35件の事件で約400名が殺害され、いずれの時期も犠牲者の大半は指定カーストを中心とした低カーストに属しているとしている [Ramakrishnan 1999: 30-31]。なかでもランヴィール・セナーの暗躍振りは群を抜いており、ルイスの研究では、結成された1994年から2002年までの8年間に約30件の虐殺を行ない262名を殺害した。前述のクマールの研究では、2005年までの犠牲者数は300名に上っている。<sup>10)</sup>

上位カースト・上層後進カースト地主は、加害者であると同時に犠牲者でもある。ルイスの上述の研究では、1976年から89年までに70名が殺害され、1990年から2001年までの期間では115名が殺害された。貧農の犠牲者と比較して割合は小さくなるものの、無視できない数の地主が殺されている。

地主殺しの実行者は、主としてナクサライト（Naxalite）と通称される左翼過激派である。ナクサライトという名前は、紅茶の産地として有名な西ベンガル州ダージリン県のナクサルバリ（Naxalbari）地区で最初の蜂起を行なったことに由来している。1967年から運動を始めた彼らは、1970年代に入るとビハールでも活発に活動を展開し、暴力革命を通じて社会経済的解放を実現するために、「階級の敵」である地主を殺害した。<sup>11)</sup>

地主の私兵集団は、これらナクサライトの活動に対抗するために作られたといってよい。ラ

---

9) Bhushan [1977: 974], Rudolph and Rudolph [1998: 381, 390], Pathak [1993: 28-35], Louis [2002: 242-246, Table 8.8] を参照のこと。死者数について、ルイスは14名としている。

10) Gupta [2001: 2743, Table 2] も、農業紛争に関する暴力の発生件数に関し、1989年までは50件だったものが、1990年から1994年までで40件、ランヴィール・セナー登場後の1995年から2000年までで81件と、1990年以降、とりわけ1995年以降増加傾向にあることを示している。

11) ナクサライト運動の展開につき、中溝 [2008b], 中溝 [2009a] を参照のこと。

ンヴィール・セーナー司令官ブラフメシュワール・シンも、ナクサライトの暴力に対抗するために、ランヴィール・セーナーは結成されたと述べた。<sup>12)</sup> ビハール農村における暴力的対立は、貧農の犠牲者が地主の犠牲者と比較してはるかに多いという不均衡は存在するものの、地主による一方的な殺害ではないことをここで確認しておきたい。

それでは、このような農村における殺し合いは、なぜ起こったのだろうか。なかでも、私兵集団の集大成とも呼ぶべきランヴィール・セーナーは、なぜ1994年以降という特定の時期に出現したのだろうか。これまでの研究は、私兵集団の出現という現象をどのように捉えてきたか、次に検討してみよう。

#### 4. これまでの研究

農村における対立が、組織的な外観を纏った殺し合いにまで発展するのは、なぜだろうか。都市と比較して概して流動性が低いといえる農村においては、対立を顕在化させるよりも、隠密な形で処理する「日常型の抵抗」の世界の方が一般的であると考えられる。<sup>13)</sup> 地主も貧農も、自らの身を危険に晒してまで、なぜ暴力に訴えるのだろうか。この点を解き明かすために、これまでの研究は、主に3つの観点から問題に迫ってきた。第一に、経済的要因を重視する説、第二に、社会的要因を重視する説、最後に、政治的要因を重視する説である。

##### 4.1 経済的要因

最初に経済的要因を重視する研究から検討しよう。代表的な研究としてプラサードの研究を挙げることができる [Prasad 1987]。プラサードは現地調査をもとに、「半封建的 (semi-feudal)」な生産関係が残存していることが、農村における暴力的対立の原因であると論じた。すなわち、灌漑等の農業生産を支えるインフラストラクチャーが未整備であることに加えて、刈分小作制や農奴制、強制労働といった「半封建的」な制度が残存しているために、ビハールにおける農業生産性は一向に上昇しない。それゆえ地主が搾取を強め、これに対し小作人・農業労働者が反発し、高まった緊張が暴力化した結果として、現在の殺し合いに発展しているとする。1980年代における紛争の暴力化を受けて発表されたプラサードの仮説は、ルイス [Louis 2002: 89-115] にみられるように、1990年代以降の展開を説明する際にも援用されている。

12) ブラフメシュワール・シンに対する前掲インタビュー (2002年11月5日)。

13) 「日常型の抵抗」については、Scott [1985]、スコット [1994] を参照のこと。本稿で取り上げるベラウル村においても、筆者の調査中 (2002年11月-12月) にコメの収穫を行っていたが、収穫作業に従事していた農業労働者は、自らの取り分となる稲穂の束を大きく作ることによって定められた報酬以上の収入を得ていた。あるブミハール地主によれば、報酬は現物供与制で17束のうち1束が農業労働者の取り分となるが、労働者は自分の束を2倍から3倍の大きさで作るので、実際には収穫高の6分の1になっているとのことだった (2003年2月3日インタビュー)。ただし、筆者の観察によれば、労働者の束は多少は大きいものの、2倍から3倍にもなる束はみつげることができなかった。重要なことは、地主がこの「不正」を認識し文句を言いつつも、黙認していたことである。労働力不足が大きな原因であると考えられる。実際に、ベラウル村だけでは労働力が不足するため、他県からの出稼ぎ労働者に頼っていた。



同じ経済的要因を重視する見解として、緑の革命の影響を指摘する研究もある。パトナ県の事例を検討したチョードリーは、ザミンダーリー制廃止<sup>14)</sup>そして緑の革命の進展によって出現した、主に上層後進カーストからなる新地主層の搾取が、旧来の上位カースト地主層よりも苛酷であるために貧農の反発を招き、これにより左翼過激派が貧農の組織化に成功したとする [Chaudhry 1988]。

上層後進カーストがより過酷な搾取を行なう傾向がある、という指摘自体はプラサードも行なっている。<sup>15)</sup>ただし、プラサードの強調点は「半封建的」制度の残存にあり、緑の革命という新農業政策が生み出した階級変動を主な原因とするチョードリーとは異なる説明の仕方となっている。もっとも、両者ともに経済的要因を重視する点では変わらない。

これから検討するように、ランヴィール・セーナーの出現に経済的搾取、階級闘争の要素は確かに存在し、経済的要因の重要性は否定できない。しかし、私兵集団の動態を分析の対象とした場合、経済的要因からの説明は難しい2つの問題を抱えることになる。

第一に、変化を説明する変数の取り方である。「半封建的」制度の残存に伴う搾取にせよ、「緑の革命」の進展に伴う格差の拡大にせよ、どの段階まで到達すればランヴィール・セーナーのような組織化の進んだ私兵集団が出現するのか、これまでの研究は必ずしも明らかにしてこなかった。プラサードやチョードリーの研究は、ランヴィール・セーナー出現前の仮説であることからこの点を問うことは難しいとしても、出現後の研究からもこの点は明らかではない。

第二に、私兵集団の構成主体の変化である。上層後進カーストによる搾取が上位カーストよりも過酷であることをプラサードもチョードリーも指摘したが、すでに検討したように、1990年代以降、私兵集団の構成主体は変化する。すなわち、上層後進カーストの私兵集団は姿を消し、上位カーストの私兵集団の暗躍が目立つようになった。経済的要因を重視する仮説からは、上位カースト地主が経済的地位を低下させた結果として搾取を強め、反撥する貧農との対立が暴力化したという推論が成立するが、この点に関し実証的に論じた研究は、管見の限り存在しない。これまでの研究の不十分な点と指摘できるだろう。

このように考えると、経済的要因の重要性は否定できないものの、説明変数として不十分な点が残る。

---

14) ザミンダーリー制とは、イギリス植民地政府が、地租収入を確保するために18世紀末に導入した制度である。ザミンダール(地主)に永代定額の地租納入義務を負わせる一方、土地所有権を与えこれを保護した。地租が定額に固定されていることから資本家的な農業経営者が出現し、生産性も向上することが期待されたが、現実には寄生地主制が展開され、独立時には生産性停滞の元凶とみなされた。ザミンダーリー制の優れた要約として中里 [1989] を参照のこと。

15) プラサードは、新たに出現した「農村の寡頭支配層」のなかに、上層後進カーストも入れている [Prasad 1987: 850-851]。先述のペルーチ村虐殺事件に関し、上層後進カーストが上位カーストと戦うとともに下層カーストへの搾取を強めていったと指摘しているものとして、Bhushan [1977: 974] を参照のこと。

## 4.2 社会的要因

それでは、社会的要因を重視する研究はどうだろうか。代表的な研究として、フランケルを挙げることができる [Frankel 1990]。彼女は、バラモンを中心とする上位カーストが支配するビハールの社会秩序が、政治的、経済的要因から徐々に崩壊していく文脈のなかに農村における虐殺を位置づけている。具体的には、ナクサライトの支持拡大過程の分析において、経済的搾取が根底にあることを認めつつも、貧農の支持を得ることに成功したのは、地主による性的暴力などの社会的搾取の問題をまず取り上げたことが大きかった点を指摘する [Frankel 1990: 119-124]。そのうえで、地主の側においても、経済的要因に加えて、農業労働賃金の賃上げを地主仲間の面前で要求され、体面を傷つけられたと感じたことが私兵集団の結成、虐殺へつながっていったと分析する。

社会的要因の重要性も、経済的要因と同様に、およそ否定することはできない。これから検討するように、「体面を傷つけられた」ことに起因する怒りは、現実のさまざまな局面で顔を出すことになる。しかし、私兵集団の構成主体の変化を説明するためには、経済的要因と同じ問題を抱えることになる。すなわち、「体面が傷つけられた」ことが重要であるとしても、どのような体面がどのように傷つけられれば、私兵集団の構成・特徴に変化が生じるのか、そしてランヴィール・セナーが出現するのか、必ずしも明らかではない。

## 4.3 政治的要因

最後に、政治的要因を重視する研究を取り上げたい。代表的な研究として、コーリーの研究を挙げることができる [Kohli 1992: 205-237]。コーリーは経済・社会的要因の重要性は認めつつも、重要なのは、警察や官僚機構の機能不全といった国家の統治能力の問題であり、なかでも政党組織、とりわけ、独立運動を主導し独立後も長らく政権の座にあったインド国民会議派の組織が崩壊したことが、農村社会における暴力的対立を生み出したとしている。国家と社会を結ぶ結節点としての政党が利害調整能力を失ったことが、暴力の蔓延を導いたとする仮説である。

近年出版されたクマールの研究 [Kumar, A. 2008] も、国家の機能不全という要素を最も重視する点で、コーリー仮説を踏襲している。クマールは、多くの要因を指摘するなかで、1990年代以降ビハール州政治において国家機構の私物化が進展したことを重視する。<sup>16)</sup> 国家の私物化は機能不全に帰結し、ランヴィール・セナーという高度に組織化された私兵集団が生み出

16) クマール [Kumar, A 2008: 167] 参照のこと。クマール自身は、自らの研究はコーリーの「統治能力の危機」という枠組みとも、フランケルの「バラモンの社会秩序の崩壊」という枠組みとも違うと力説し、ランヴィール・セナーを「暴力的な政治的企業家」、「共同体の戦士」と捉えた点に意義があるとしている。しかし、これらの捉え方はコーリーやフランケルの枠組みと矛盾するものではないし、「国家機構の私物化」を最も重視する点で、コーリーの枠組みを継承していると考えられる。クマールの研究には、ビハール州政治について語られるジャーゴンが散りばめられてはいるが、それらを論理的につなげているとはいえ、議論として散漫な印象を受ける。

されたという仮説である。

政党組織の崩壊にせよ、国家の私物化にせよ、それだけでは私兵集団の暗躍を説明することにはならない。コーリー説についていえば、経済的要因、社会的要因を重視する研究と同様に、説明変数の取り方の問題が生じる。すなわち、会議派をはじめとする議会政党の党組織がどの程度崩壊すれば、ランヴィール・セーナーを生み出すのか、必ずしも明らかではない。

クマールは、国家の私物化と関連づけて、ビハール州政治における権力闘争を変数として組み込んでいる点で、注目に値する [Kumar, A 2008: 171-177]。すなわち、1990年代以降、後進カーストのヤーダヴ出身であるラルー・プラサード・ヤーダヴ (Laloo Prasad Yadav)<sup>17)</sup> 政権下で進行した、後進カーストによる上位カーストからの奪権が、ランヴィール・セーナーの誕生に結びつくひとつの重要な要因になったとしている。彼によれば、「ランヴィール・セーナーは、伝統的なバラモンの秩序を復興しようという試みだけではなく、ビハールにおける民主政治の変わりつつある現実に対応しようとしたといえるだろう。それゆえ、振り返ってみれば、ビハールにおけるランヴィール・セーナーの出現は、民主主義に対する古典的な畏怖の違った形での表現だったとあって良い。すなわち、不平等を平等にし、かつて優位を占めていた者が脇に追いやられることに対する恐れである」 ([Kumar, A 2008: 177])。

民主政治の変化を説明変数とする試みは、魅力的である。政治権力の中心が上位カーストから後進カーストに移ったという変化は、私兵集団の構成主体における変化を説明できそうである。しかし、クマールの研究にも不十分な点を指摘することができる。

第一に、民主政治の変化が社会の変化に具体的にどのように結びついたのか、実証されていない。選挙政治が社会における政治的階層構造を変えることについて言及はされているが [Kumar, A 2008: 176]、この指摘自体、ホーサー (Walter Hauser) とシンガー (Wendy Singer) の研究を引用する形で行なわれていることからわかるように、実証は行なわれていない。すなわち、政治の変化が、社会の何を具体的にどのように変えたのか、明らかにしていない。この点は、ランヴィール・セーナーについての本格的な研究でありながら、発祥の地であるベラウル村で調査を行なった形跡がみられないことに象徴されている。<sup>18)</sup>

---

17) ラルーは、後に検討するように、1990年代におけるビハール州の政治変動を主導した政治家である。1974年に全国的な反会議派運動として展開されたJP運動(運動を主導したジャヤ・ブラカージュ・ナラーヤン [Jaya Prakash Narayan] の頭文字を取ってJP運動と称される)において学生運動の指導者として頭角を現し、反会議派の政治家として1990年州議会選挙で会議派政権を打倒した。その政策は、第一に、社会正義の実現、すなわち上位カースト支配の打破、第二に、セキュラリズムの擁護、最後に貧困の解決、の3点に要約できる。2005年州議会選挙で敗北するまで15年間政権を維持し、後進カーストによる下克上を主導した。第一点と第二点は成功したが、最後の点では実績を残せなかったと評価され、出身カーストであるヤーダヴを偏重したと批判されている。

18) クマールは、「ランヴィール・セーナーの起源は、謎に包まれている」と記している [Kumar, A 2008: 129]。後述のように、ベラウル村で起こった事実を確定する作業は大変に困難ではあるが、筆者の調査経験からは、「謎」は次第に解き明かされていくものである。「謎に包まれている」と片づける前に、少なくとも村人に話を聞く努力は行なうべきだろう。

第二に、出現の時期と規模の説明である。ビハール州政治の変化が、私兵集団の構成の変化に関連しているという指摘自体は、クマールがはじめて行なったわけではない。たとえばグプタは、表への注釈という短い文章ではあるけれども、ランヴィール・セナーの構成主体であるブミハール・カーストが、ラージプートやヤーダヴ、クルミといったラール政権の同盟者よりもさらに攻撃的になった理由として、おそらくより脅威感を抱いたからだろう、と指摘している [Gupta 2001: 2743]。ラール政権は1990年州議会選挙の結果を受けて成立し、後進カーストによる上位カーストからの奪権は、政権成立直後から着々と進んでいった。それでは、なぜ、ランヴィール・セナーは1990年代後半という特定の時期に最も活発に、かつ組織力を備えて活動したのか。クマールの研究は、政治的要因を最重視し、ビハール州政治について語っているにもかかわらず、この問題には十分に答えていない。その意味で、これまで検討してきた研究と同じ問題を抱えているといえる。

以上、これまでの学説を、経済的要因、社会的要因、政治的要因をそれぞれ強調する仮説に整理して検討してきた。いずれも重要な仮説ではありながら、私兵集団の構成と態様の変化、そしてランヴィール・セナーの活動時期については十分に説明できていないことがわかった。それでは、どうすればよいだろうか。手がかりとして、クマールが「謎に包まれている」 [Kumar, A 2008: 129] と形容したランヴィール・セナーの起源を、やはり追求める必要があるだろう。

## 5. ランヴィール・セナーの誕生

### 5.1 ブミハールの村ベラウール

ランヴィール・セナーは、ビハール州の穀倉地帯であるボジョプール (Bhojpur) 県に位置するベラウール (Belaur) 村で生まれた。<sup>19)</sup> ベラウール村は、県庁所在地であるアラ (Ara)

19) ベラウール村における調査において、最初に付言しておきたい。これから検討するように、ベラウール村はランヴィール・セナー発祥の地であり、村人同士が殺し合った村である。2002年11月から2003年9月にかけて断続的に行なった調査時には、表面上は激しい対立は収まっていたものの、最初の衝突が起こった1994年から8年しか経っておらず、上位カーストと指定カーストの亀裂は依然として深かった。村における緊張は高く、そのため調査対象者（とりわけ指定カースト）を危険に晒さないために、ランヴィール・セナーの調査ではなく、「農業経済学の調査である」と偽って調査を行なった。セナーの件で調査に入ったことがブミハール地主に知られると、調査に応じてくれた指定カーストに累が及ぶことが十分に予想されたためである。実際に、ジャーナリストがセナーの件で取材に来た後、取材に応じた指定カーストがブミハール地主から殴打されたという話も耳にした。

このため、対象者が指定カーストの場合はもちろんのこと、ブミハール地主であっても匿名にした方が良く判断した場合は、匿名表記にしている。ただし、特定の匿名対象者から得た証言を繰り返し引用した場合は、「前掲」と表記することにより、同一人物からの証言であることを明記している。

調査対象者に対して調査目的を偽ることは、当然のことながら倫理的に問題がある。執筆中の現在でも、自分の判断が正しかったか迷いはある。倫理的な問題に加えて、目的を偽ったことにより、本来の目的であるランヴィール・セナーの結成に関する質問を自在に行なえなかったことをお断りしておきたい。なお、ベラウール村においては、村民64名にインタビュー調査を行なった。

表4 ベラウール村のカースト構成 (2001年有権者名簿)

分類	カースト	人数	割合
上位カースト	バラモン (Brahmin)	206	2.99
	マハー・バラモン (Maha Brahmin)	113	1.64
	ブミハール (Bhumihar)	2047	29.70
	カヤスタ (Kayastha)	35	0.50
	上位カースト合計	2401	34.84
上層後進カースト (upper-backward)	ヤーダヴ (Yadav)	1507	21.87
	クルミ (Kurmi)	69	1.00
	バニア (Banias)	262	3.8
	上層後進合計	1838	26.67
下層後進カースト (lower-backward)	カハール (Kahar)	187	2.71
	クムハール (Kumhar)	117	1.70
	その他	558	8.1
	下層後進合計	862	12.51
	後進カースト合計	2700	39.18
指定カースト	ドゥサド (Dusad)	394	5.72
	チャマル (Chamar)	889	12.90
	ムサハール (Musahar)	185	2.68
	その他	63	0.92
指定部族	バンジャラ (Banjara)	7	0.10
	指定カースト/部族合計	1538	22.32
ムスリム (Muslim)		252	3.67
総計		6891	100

出所：現地調査より筆者作成。下層後進カースト、指定カーストについては、人口の多いカーストについてのみ表記し、それ以外は「その他」としてまとめた。

から約 16 km とほど近く、村内にアラ水路 (Ara canal) が流れているため、灌漑設備の未発達なビハールにおいては例外的に水利に恵まれてきた。面積は約 1,840ha、人口も約 1 万 2,000 人程度と大規模で、<sup>20)</sup> ボジョプール県内で最大規模の村として知られている。

最初に村の社会構成を検証したい。村の有権者のカースト構成を示したものが表 4 である。最大多数コミュニティは上位カーストのブミハールで、全人口の約 3 割を占める。次がヤーダヴで約 21%、その次が指定カーストで、指定カーストの各コミュニティを合計するとこれも約 22%になる。このようにベラウール村には大きな 3つのコミュニティが存在する。

それでは、経済はどうか。村の経済を的確に把握することは困難であるが、農地が重要な資産であることを考えると、村の農地の 9 割を所有するとされるブミハールが最も豊かなコミュ

20) 面積については、B. B. Lal, *Census of India 1981, Series 4-Bihar, District Census Handbook, Bhojpur District*, pp. 324-325 を参照した。人口については、Office of the Registrar General, India, *Census of India 2001, Primary Census Abstract-Uttaranchal, Bihar, Jharkhand* (CD 版) を参照した。正確な人口は、1 万 1,962 名である。

表5 ベラウール村における農地所有規模平均

	上位カースト (ブミハール)	後進カースト (ヤーダヴ/ムスリム)	指定カースト
所有農地 (bigha)	21.2	5.9 (ヤーダヴ) 1 (ムスリム)	0.2

出所：ビハール州ボジョプール県ベラウール村で行なった現地調査 (2002年11月～2003年2月) に基づき筆者作成。

注) サンプル数はブミハール・カースト (上位カースト) 13名, ヤーダヴ・カースト (上層後進カースト) 13名, 指定カースト 11名, ムスリム 1名である。所有農地は個人単位ではなく家族単位で計算している。農地は個人単位で経営されているより家族単位で経営されていることが多いためである。更に自己申告に頼っているため過小に申告する傾向が強いことを付言しておきたい。たとえば、あるブミハール地主は日常会話のなかで 30 bigha 所有と明言していたが、インタビューでは 18 bigha と修正した (2002年11月28日インタビュー)。単位については 1 bigha=0.25 ha。

ニティーとなる。<sup>21)</sup> 筆者の行なったサンプル調査においても、この傾向は確認された (表5)。

サンプル数は少ないながら、上位カースト (ブミハール) と後進カースト (ヤーダヴ)、指定カーストの間に農地所有状況に大きな違いがあることがわかる。階級的にも、ブミハールは地主であり、ヤーダヴは小作人であり、指定カーストは農業労働者であるという対応関係がおおよそ存在していた。ベラウールが、ブミハールの村と呼ばれる所以である。

## 5.2 社会問題と経済問題

### 5.2.1 殴打事件とナクサライト

それでは、なぜ、ランヴィール・セーナーがベラウール村で誕生したのだろうか。何が起こったのだろうか。契機となったのは、かつてナクサライトとして武装革命路線を実践したものの、1980年代に議会闘争路線に転換し、議会制に参加したインド共産党 (マルクスレーニン主義) 解放派 (Communist Party of India [Marxist-Leninist] Liberation: 以下 ML と略称) の活動であった。もともと、ベラウールの位置するウドワント・ナガール郡 (Udwantnagar Block) の南隣であるサンデーシュ郡 (Sandesh Block)、サハール郡 (Sahar Block) は農業紛争の激しい地域として知られていた。ビハール州でナクサライトが初めて本格的に活動を開始したのは、サハール郡のエクワリ (Ekwari) 村であり、1970年代から ML は、この地域一帯で主に指定カーストの支持を得ながら一定の勢力を保ってきた。<sup>22)</sup> その ML がベラウール村にやってきたのは 1990年のことであった。

ML の活動家であるヴィルバル・ヤーダヴ (Virbal Yadav) によると、当時のベラウール

21) 数値については、推計に過ぎない。ベラウール村の調査で、最も多かった回答が9割という数値だったために、便宜的に採用した。

22) ボジョプール県におけるナクサライトの活動に関し、Mukherjee and Manju [1979] 参照のこと。ML のアラ事務所における Mr. Ashok Kumar (District office secretary, Ara), Mr. Santosh Sahar (State Committee member) へのインタビューでも確認した (2002年12月2日, 肩書きはいずれも当時)。

村はブミハール地主の横暴がひどかったという。<sup>23)</sup> ベラウールを活動地として選択したのは党から担当を命じられたからであるが、横暴を目の当たりにして、ここで活動すれば党勢を拡大できるのではないかと自らも考えた。契機となったのはひとつの事件であった。

話は1990年に遡る。指定カーストがブミハールの前で座ることはできないというのは、ビハールの他の農村事例と同様に、カースト差別の象徴としてよく使われる譬えであるが、<sup>24)</sup> まさにこの点をめぐって問題は起こった。1990年のある日、タラリ郡 (Tarali Block) 内の村に居住するブミハールがベラウール村に居住する同じブミハール・カーストのカメシュワール・チョドリに招待された。招かれたブミハールは、ベラウールの地理に不案内だったため、自分の村の徴税官であり、ベラウール出身のラーム・キショール・ラームに道案内を頼む。指定カーストであるラームは快く引き受け、ブミハールをカメシュワールの家に案内した。

無事に引き合わせると、カメシュワールはブミハールには椅子を勧めて茶を供したが、ラームには何も勧めず、ラームは立ち尽くしたままだった。そこで招待されたブミハールは固辞するラームに椅子とお茶を強く勧めた。ラームは受け入れて、椅子に座りお茶を飲みながら歓談した。

カメシュワールはこれに激怒する。彼にとって、指定カーストの分際でブミハールと一緒に椅子に座り、お茶を飲みつつ歓談するなど許せないことだった。体面が傷つけられたと感じたカメシュワールは、客を帰した後、ラームを木に縛り付けて殴る蹴るの暴行を行ない、「教訓」を与えた。

これまでのベラウール村であれば、この事件はこれで終わりであった。「何かあるとすぐ殴る」ブミハールの態度として特に酷いわけではなかったし、<sup>25)</sup> 殴られた指定カーストが泣き寝入りすることも珍しくなかった。指定カーストであるため、警察に行っても相手にしてもらえず、してもらえないどころかいやな思いをするのが関の山だったからである。しかし、ラームは違った。役人であるということが大きな要因であったが、彼はこの事件の被害届を警察に提出し、刑事手続きに乗せることを決意する。これを助けたのが、ヴィルバル・ヤーダヴであった。

ヴィルバルはこの件を契機にベラウール村の指定カーストの信頼を勝ち得ていく。その後

---

23) ML 活動家ヴィルバル・ヤーダヴ氏 (Mr. Virbal Yadav) に対するインタビュー (2003年9月16日: 氏の居住村にて)。以下の経緯は基本的には氏に対するインタビューから構成した。他の村人の話と照合した結果、おそらく最も正確に事実を反映していると考えられるためである。ただし、紛争の現場において、事実を確定することは容易ではない。重要な事実については、適宜証言を補っている。

24) たとえばパールティは、ビハール農村において1980年代まで (原文には「数年前まで」)、指定カーストはおろか後進カーストでさえも、良い服を着たり靴を履くことは許されず、上位カースト地主の前で座ったり、正面を向いて立つことは出来ず、議論することも出来なかったと報告している。Bharti [1990: 980] 参照。

25) 指定カーストに対するインタビュー (2002年12月4日: 氏の自宅にて)。このほか、ブミハールの抑圧的な態度については、数多くの証言が得られた。筆者の調査によれば、このほかにも指定カーストの6名、ヤーダヴの3名が同様の証言を行なった。

も事件は続き、1993年には共有地をめぐる紛争から発砲事件も起こるが、立て続けに大事件が起こったのは、ランヴィール・セーナーが結成された1994年であった。はじめは労使関係の問題であった。

### 5.2.2 労使問題と性暴力

プミハール地主ディープ・ナラヤン・チョードリー (Deep Narayan Choudhary) の下で7年間タダ働きを強いられていたディーパ・ムサハール (Deepa Musahar) は、ついに生活が立ち行かなくなったことから、1994年4月に他の地主の所で働くことを決意する。ディーパが他の地主の所に行こうとしていた道中で、激怒したディープ・ナラヤン・チョードリーはディーパを誘拐し監禁した。ヴィルバルは事件を聞き、村の仲間とともにディープの家を訪れ夕方までにディーパを解放するよう要求したが、ディープはこれを拒否した。ヴィルバルと指定カーストは、村に一本しかない車道を封鎖し抗議した (図1参照)。

道路封鎖による交通渋滞に、捜査会議に出席する副警視がたまたま巻き込まれた。事情を聞いた副警視は、指定カーストに捜査会議でこの問題を取り上げることを確認し、指定カーストは封鎖をとりあえず解除する。副警視は約束どおりこの問題を取り上げ、会議後、郡開発官 (BDO: Block Development Officer) を伴ってベラウル村を訪れ、ディーパを解放することに成功した。ただ、指定カーストの要求にもかかわらず、監禁したディープが訴追されることはなかった。

次は性犯罪である。同じくプミハールの犯罪行為が問題となった。婦女暴行魔として悪名高かったBは、1993年にもバニアの少女に暴行を働き大きな問題となったが、1994年の事件はより酷いものであった。6月の日曜日での出来事であったが、Bはその一味とベラウル・パ

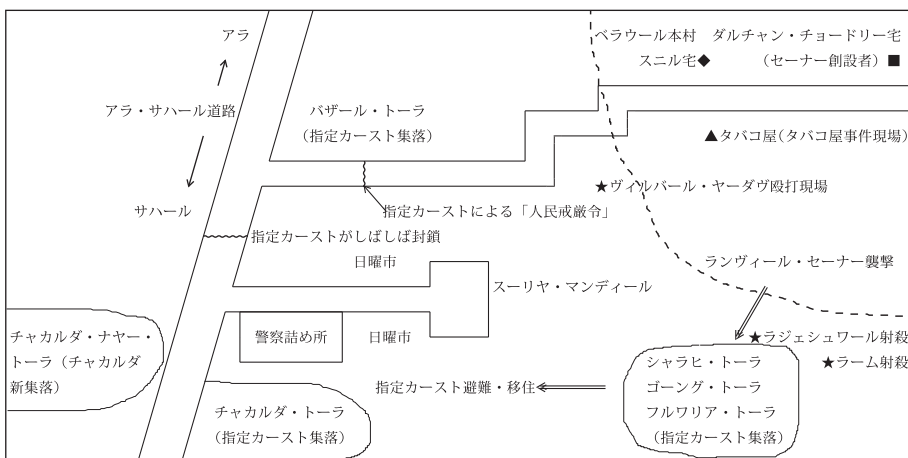


図1 ベラウル村地図

出所：筆者作成。



ンチャーヤット内に位置するダルシャン・チャプラ (Darshan Chapra) のヤーダヴ女性に暴行を働こうとした。女性には夫も同行しており、夫が抗議すると、Bは夫を木に縛り付け、親指を潰したうえで、目前で妻に暴行を働いた。この事件は、ベラウル村の指定カーストの激しい怒りを呼んだ。

この2つの事件をめぐって、指定カーストはヴィルバルの主導で会合を開く。強制労働と性暴力の問題についてプミハールに謝罪を要求し、二度と繰り返さない確約を求めた。槍玉に挙げられたディーブ・ナラヤン・チョードリー、Bも会合に出頭するよう要請されたが出席するはずもなく、会合は指定カーストの団結を確認するにとどまった。会合の後訪れた指定カースト代表に対し、ディーブ・ナラヤン・チョードリーの息子は和解交渉に応じる意向を示したものの、Bの父親はにべもなかった。「田畑を手放しても息子だけは絶対に手放さない」と息子の引渡しを断固として拒否し、「あいつは荒くれものだから手をつけようがない」とこれを放置した。この対応が指定カーストの更なる怒りを招くことになる。

### 5.2.3 経済問題とストライキ

これらの社会問題に、経済問題が加わった。農業労働賃金に関して当時ベラウル村では、政府の定めた最低保障賃金が1日30ルピーであるのに対し、男性は1日18ルピー、女性は1日15ルピーとほぼ半額に抑えられていた。折からの物価上昇に伴い生活が苦しくなっていた指定カーストは、1994年期の田植えに際し賃上げを要求することを決定する。チャカルダ集落 (Chakardha tola) の指定カーストが始めた交渉は、指定カーストが30ルピーを要求したのに対し、プミハールは25ルピーが上限であると主張し、折り合わなかった。<sup>26)</sup> 交渉はチャカルダ集落を飛び越えて全村に拡大し、膠着状態を打開するために指定カーストはヴィルバルの指導でストライキを決行した。

田植えが機械化されておらず、かつ稲作一毛作地帯であるベラウルにおいて、2週間程度で迅速に終えなければならない田植えの遅れは、多大な損失をもたらす。ストを決行している指定カーストに対し、「緊急事態」ということで30ルピーから35ルピーを支払うプミハール地主も出現したという。先述した社会問題を話し合うために、プミハール側でも対話の場を設けようとする知識人グループが作られたが、<sup>27)</sup> このグループが賃金問題についても調停に乗り出し、双方の交渉の結果、25ルピーが支払われることで交渉は妥結した。

しかし、交渉は円満解決とはほど遠かった。あるプミハール地主によれば、「ストさえ行

26) チャカルダ集落の指定カーストもヴィルバル・ヤーダヴ氏と同様の証言を行なった (2003年2月9日)。

27) ヴィルバル氏はこのグループについて、samajhdār admīと表現した。大学や学校の教師、医者、修士号取得者など学のある人という意味だと補足したため、知識人グループと訳した。ヴィルバル氏は、彼らは、プミハールのならず者や地主よりも信頼できたと言っている。知識人グループは、ベラウル村の各集落から選ばれた17家族から構成された。17家族につき、個人ではないかと尋ねたが、家族であるという回答だった。ヴィルバル氏に対する前掲インタビュー (2003年9月16日) より。

なえば、100 ルピーでも要求することができる。奴らはストを盾にこの村を乗っ取ろうとした」。<sup>28)</sup> 指定カーストによれば、「ブミハールは、次はわれわれが農地を要求するのではないかと恐れた」。<sup>29)</sup> 両者の緊張をはらんだまま 1994 年の田植えは行なわれた。その最中に起こったのが、タバコ屋事件であった。

### 5.3 高まる緊張とタバコ屋事件

賃金問題は一応の妥結をみたけれども、社会問題は解決されていない。そこでブミハール知識人グループとヴィルバルを代表とする指定カーストは 8 月 13 日に会合をもつ予定であった。その直前の 10 日に起こったのが、タバコ屋事件である。

これは奇妙な事件である。10 日の夕方、タバコ屋シドナート・サオ (Sidnath Sao) の店に、前に住むスニル・チョードリー (Sunil Choudhary) がタバコを買いにやってきた。いつも置いてある場所にタバコをみつけられなかったサオは「切らしている」と応じ、スニルは仕方なく店を後にした。しかし実際にはタバコはないのではなく、息子が別の場所においていただけであった。たまたま遊びに来ていた孫がタバコで遊ぶのをみた息子が、安全のため孫の手の届かない所にタバコをしまっていたのである。それをサオは知らなかった。しばらくの後、トラクターを運転していた別のブミハールがサオの所にタバコを買いに来る。

その時はたまたま息子が同席していた。「ない」と応じるサオの傍で息子は「ある」と答え、2 箱取り出してきた。あったことに驚きつつも、サオは 2 箱要求するブミハールに対し、「1 箱はスニルに渡さなければならぬから」と義理を立て、1 箱だけ販売した。ともあれタバコを手に入れたブミハールはタバコをふかしながらサオの店を後にする。

これをスニルが目撃していた。「嘘をつかれた」と激怒したスニルは、サオの店に押しかけ、サオが「さっきのは間違いだった。1 箱とってあるから」とスニルに詫げるにもかかわらず、店の扉を蹴破りサオに殴りかかる。サオもラーティー (棍棒) を手に立ち向かい殴り合いが始まるが、双方の家族が間に入って、ひとまずこの場は収まった。

しかし、これでは収まらないことをサオは承知していた。前年 1993 年に姪が例の B による性暴力の被害を受けた件で、ヴィルバルの助力を受けた経緯から、サオはチャカルダ集落 (トーラ) に滞在していたヴィルバルを早朝 4 時頃たずねる。サオに対し、ヴィルバルは仲間とともに朝 8 時頃サオの家を訪れることを約束し、5、6 人の仲間と連れ立ってサオの家を訪れた (図 1 参照)。

スニルも仲間のブミハールを引き連れてサオの家にやってきた。両者の話し合いにより、夕方あらためて集まり、責任の所在を明確にすることになった。いったんお開きとなり、ヴィルバルとともにやってきた指定カーストも農作業を行なうためにサオの家を後にした。ヴィル

28) ブミハール地主 A 氏に対するインタビュー (2003 年 2 月 3 日)。

29) チャカルダ・ナヤー・トーラの指定カーストに対するインタビュー (2002 年 12 月 4 日)。

バールも引き上げようとしたが、サオがとどまって欲しいと懇願したため、サオ宅で朝食をとることにした。

ほどなく、村で二番目の金持ちであり、後にランヴィール・セナーの創設者となるダルチャン・チョードリーの家の方から、「悪いのはヴィルバールだ。貧乏人の味方ヴィルバールをやっつける！」という怒号が聞こえてきた。身の危険を感じたヴィルバールは、サオの家からあわてて逃げ出したが、行く手はすでにふさがれていた。約20名のブミハールに捕まったヴィルバールは酷いリンチを受け、32針縫う瀕死の重傷を負ってしまった。

この事件に指定カーストは強く反撥する。抗議のため再び車道（アラーサハール道路）を封鎖したが、今度は警察も役人もやってこなかった。捌け口をみつけれない指定カーストは、事件の首謀者スニルの弟バドゥー・チョードリーを、車掌として働いていたバスから引きずり下ろして監禁した。<sup>30)</sup> 背後にはML指導部の指示があったとされる。他方ブミハールは、警察に誘拐の被害届けを提出し、警察はチャカルダ集落を捜索したもののバドゥーを発見することができなかった。膠着状態のなかで指定カーストとブミハールの緊張は高まり、夜間はブミハールによる武器搬入を防ぐという名目で指定カーストはベラウル本村（Main Village）からアラーサハール道路へ通じる道を封鎖した。指定カーストがブミハールの移動を許可しなかった「人民戒厳令」は、屈辱として今に至るまでブミハールの記憶に残っている。<sup>31)</sup> 緊張のなかでブミハールも指定カーストもお互い暴力的になり、指定カーストによる人質に対する扱ひも酷いものとなっていった。<sup>32)</sup>

しばらくの後、ML指導部は監禁場所の移動を指示した。地元サンデーシュ選挙区選出の現州議会議員ヴィジェンドラ・ヤーダヴ（Vijendra Kumar Singh Yadav）もこの件では指定カーストを支持し、手下を監禁場所へ送っていたという。捕らわれていたバドゥーは移動の最中に逃亡を試み、ヴィジェンドラの手下が威嚇のために発砲する。それがバドゥーの急所に当たり、彼は死亡してしまった。ML指導部はこの「偶発的な事故」を「ヴィジェンドラのせい」として非難するが、いくら指定カーストが「よそ者がやったことでかつ故意ではない」と主張しても、ブミハールにしてみれば「殺された」ということになる。<sup>33)</sup> ランヴィール・セナー結成の引き金は、まさにこの時引かれた。

---

30) 前掲ブミハール地主A氏（2003年2月3日）、指定カースト農業労働者B氏（2003年2月6日：氏の自宅にて）、指定カースト農業労働者C氏（2003年2月9日：氏の自宅にて）に対するインタビュー。前掲指定カースト農業労働者B氏によれば、逃げようとしてバス停にいた当事者（Badhu Choudhary）を指定カーストが捕まえた、とのことである。“Naxals, Landlords clash in Bihar,” [*The Times of India* (Bombay), October 6, 1994] も「地主の兄弟（brother of a landlord）」を捕まえたとしている。捕まえたのか、引きずり下ろしたのか、証言は分かれるが、拉致されたことは確かである。

31) ブミハール地主に対するインタビュー（2002年12月8日）。

32) 前掲指定カースト農業労働者B氏（2003年2月6日：氏の自宅にて）、前掲指定カースト農業労働者C氏（2003年2月9日：氏の自宅にて）に対するインタビュー。

あるブミハール地主によれば、「最初は二家族間の問題だったが、次第にブミハールと指定カーストの威信の問題へと発展していった」。<sup>34)</sup> 殺害事件後の9月14日、先述した実業家ダルチャン・チョードリーの自宅にブミハール地主が集まり、ランヴィール・セーナールを結成する。「指定カーストが団結した以上、我々も団結する必要があった」。<sup>35)</sup> 会合には、近隣選挙区選出のブミハール出身のグンダー政治家<sup>36)</sup>として知られるスニル・パンデ (Sunil Pande) も出席したという。

ランヴィール・セーナールと指定カーストの初めての対峙は結成4日後の9月18日に開催されたMLの大集会であった。ベラウル村で行なわれた集会には約3,000人ほどの指定カーストがベラウル村からのみならず、ボジョプール県各地から集まった。アラ選出の元国會議員で、1995年州議会選挙において地元サンデーシュ (Sandesh) 選挙区から当選したラメシュワール・プラサード (Rameshwar Prasad)、ビハール州でカリスマとしての支持を誇るヴィノード・ミシュラ (Vinod Mishra) らML指導部も集会に参加した。

集会の焦点は、タバコ屋事件であった。タバコ屋事件に象徴されるブミハールの非道な振る舞いをやめるよう要求し、やめないのであれば報復するぞ、と指定カーストの団結を誇示した。ランヴィール・セーナールは集会を遠巻きに取り囲み、発砲して指定カーストを家に帰さないと脅したが、集会は警察が警備しており、それ以上近づくことができなかった。この時点では指定カーストは無事帰宅することができた。

長年にわたり圧倒的な権威と権力を維持してきたブミハールが、屈辱感と危機感を覚えたとしても不思議ではない。高まる指定カーストの団結を前に、ランヴィール・セーナールは最初の本格的な襲撃計画を練った。実行に移されたのは、下弦の月の晩である9月28日の夜半であった。日を越して9月29日の夜中1時ごろ、ランヴィール・セーナールは多数の指定カーストが居住するシヤラヒ (Siyarahi)、ゴング (Goong)、フルワリア (Fulwaria) の3つの

33) 前掲ブミハール地主A氏 (2003年2月3日：氏の自宅にて)、前掲指定カースト農業労働者C氏 (2003年2月9日：氏の自宅にて) に対するインタビュー。1989年下院選挙でMLから立候補し当選したラメシュワール・プラサードは、ヴィジェンドラが殺害したと述べたが (2005年3月7日インタビュー：パトナの党宿舍において)、当のヴィジェンドラは関与を否定している (2003年8月31日インタビュー：アラの支持者宅において)。

34) ブミハール出身のラヴィンダール・チョードリー博士 (Dr. Ravindar Choudhary) に対するインタビュー (2003年2月6日：ボジョプール県ベラウル・パンチャーヤット議員 (ward no. 4 選出) カムラワティ・デヴィ [Ms. Kamlawati Devi] 氏宅にて)、ベラウル村ヤードヴ農民シヴシャンカール・シン氏 (Mr. Shivshankar Singh) (2002年11月29日：氏の自宅にてインタビュー)、ベラウル村ヤードヴ農民ラージ・ナラヤン・シン氏 (Mr. Raj Narayan Singh) (2002年11月29日：氏の自宅にてインタビュー) も、「優位 (supremacy) をめぐる争いが問題となった」と述べた。

35) 前掲ブミハール地主A氏に対するインタビュー (2003年2月3日)。

36) 「グンダー (gunda)」とは、ならず者、ヤクザ者の意。インドにおいて「グンダー政治家」という場合には、裏世界とつながりがあるという含意だけではなく、自らが裏世界の主体としてさまざまな犯罪行為に関与した過去があり、また現にしているという含意をもつ。筆者の印象では、日本のヤクザほどの固い組織はもたない一方で、町のならず者よりは行動範囲が広い。たとえば、後述のアナンド・モハンは、ビハール中を駆け回っている。

集落を取り囲み、発砲を開始する。銃撃は2時間ほど続き、3時過ぎにいったん停止した。20分ばかり何事も起こらなかったため、ヘビースモーカーのラーム・ルチ・ラーム (Ram Ruchi Ram) は一服と様子見をかねて外に出てしまった。そこをランヴィール・セナーの銃弾が襲った。即死には至らなかったラームは悶絶し、妻のラジェシュワール・デヴィ (Rajeshwar Devi) は急いで駆けつけたが、彼女も銃撃される。ラジェシュワールは即死だった。ラームも絶命し、殺人事件として立件されることを怖れたランヴィール・セナーはラームの死体を急いで回収した。ただしラジェシュワールの死亡にはこの時は気づかなかったという。

セナーの攻撃が終わり、指定カーストたちが表に出てくると、絶命したラジェシュワールの遺体が放置されていた。ラームの遺体が見当たらないため、指定カーストたちが血痕をたどると、ランヴィール・セナーの創設者ダルチャン・チョードリーの前庭で血痕は途絶えていた。<sup>37)</sup>

ラームの遺体を発見することはできなかったものの、指定カーストたちはラジェシュワールの遺体を抱えて、警察の駐在所に事件を報告する。駐在所はタバコ屋事件後の緊張の高まりへの対応として、スーリヤ・マンディール (Surya Mandir : 「太陽寺院」の意) の宿泊施設ダラムシャーラーを接收して設けられたものであった。指定カーストたちは事件への抗議として道路を封鎖するが、しかし警察はランヴィール・セナーに何ら有効な手を打てぬまま、29日夜には再び発砲が始まる。MLも応戦し、ベラウル村は一種の内戦状態となった。警察もベラウル村に警官を増派するが、警察が立ち寄っているブミハールの家の屋根からセナーは発砲を行なう有様で、事態の悪化を食いとどめることはできなかった。報道は、未確認情報として、県警本部長であるスニル・クマール (Sunil Kumar) がベラウルに行く途中チャカルダ集落近辺でブミハール地主から車列に発砲されたとの情報があるが、確認が取れないと報じている。<sup>38)</sup>

襲撃に際しては、ビハール中のグンダーが集結したという。武器調達を担ったグンダー政治家スニル・パンデはもちろん、ラージプート・カーストのグンダー政治家アナンド・モハン (Anand Mohan)、その妻で1994年6月にヴァイシャリ下院補欠選挙で勝利を収めたラヴリー・アナンド (Lovely Anand) など、ビハールのグンダー政治家として必ず名前が取り沙汰される者もやって来た。<sup>39)</sup> ラヴリー・アナンドは「ダウリ (花嫁持参金) に使うカネで武器を買え」と檄を飛ばしたという。MLも、ヴィノード・ミシュラら指導部の指揮の下で対抗し

37) 指定カースト小作D氏に対するインタビュー (2003年8月27日: 氏の自宅にて)。

38) “Naxals, Landlords clash in Bihar,” [*The Times of India* (Bombay), October 6, 1994] 参照。

39) ML幹部プラディープ・ジャ氏 (Mr. Pradeep Jha [Central Working Class Department]) は、スニル・パンデとランヴィール・セナーの関わりを否定するが (2002年10月24日インタビュー)、前掲『ヒンドウスタン・タイムズ』紙記者サンジャイ・シン氏は肯定する (2002年10月29日インタビュー)。彼によれば、スニル・パンデがランヴィール・セナーの司令官ブラフメシュワール・シンの命を狙っているために、ブラフメシュワール・シンが警察に投降したという。襲撃当時の村人の証言としては、指定カーストに対するインタビュー (2002年12月8日)。

て戦ったものの、ブミハール地主の圧倒的な武力の前に劣勢を挽回できなかった。

結局、最初に襲撃の対象となったシャラヒ、ゴーング、フルワリアの住民は避難を余儀なくされ、夜間は指定カースト仲間が集住するチャカルダ集落に避難し、早朝は警察に安全の確保を訴え道路封鎖を行なうことを繰り返さざるをえなかった。相次ぐ道路封鎖に警察はシャラヒ集落まで護衛はしてくれたものの駐在は拒み、襲撃を恐れた指定カーストは再びチャカルダ集落に避難する。翌朝 10 月 4 日に指定カーストはシャラヒ、ゴーング、フルワリアの住居を断念することを決め、荷物を取りに帰るための護衛を警察に要求した。警察が応じないと再び道路を封鎖し、結局、警察が車両を提供する形で、道路の反対側に位置するため池そばの政府所有地に難民として避難した。<sup>40)</sup> 難民キャンプは、チャカルダ・ナヤー・トーラ（チャカルダ新集落）と名付けられ、現在に至っている。「指定カーストを村から追い出す」というランヴィール・セナーの目的は、このような形で決着をみることとなった。

ランヴィール・セナー結成の契機となる事件を振り返ってきた。これまで殴られても従順だった指定カーストが、ブミハールを監禁した挙句に殺してしまった事件は、ブミハールの権威を揺るがし、旧来の社会秩序を転覆する衝撃をもったことは想像に難くない。村人の多くは原因としてタバコ屋事件を指摘するが、<sup>41)</sup> ランヴィール・セナー結成の契機をタバコ屋事件のみに求めるのは早計であろう。ランヴィール・セナーは、一部のブミハールを超えたブミハール・コミュニティーの支持を集め、更にはブミハールを超えた地主層の支持まで集め、<sup>42)</sup> 私兵集団の歴史上最強といわれる組織力を駆使して、ベラウール村、さらにはボジョプール県を超えて虐殺を繰り返していくからである。近年はブミハール地主の支持も離れ、活動は収束に向かいつつあるとはいえ、活動当初に幅広い支持を集めたことは確かである。タバコがきっかけで殺人事件が起こることも普通ではないが、それが私兵集団の誕生につながることも尋常ではない。緊張感の異常な高まりの背景には、いったい何があったのだろうか。

## 6. ビハール州における政治と社会

### 6.1 会議派時代のナクサライト討伐

なぜ、ランヴィール・セナーは指定カーストをため池の脇に追いやってただけでは満足せず、ボジョプール県の境となっているソネ（Sone）川を超えて他県にまで出かけて虐殺を繰

40) 前掲指定カースト小作人 D 氏に対するインタビュー（2003 年 8 月 27 日）。

41) ML の幹部である前掲サントーシュ・サハール氏（Mr. Santosh Sahar）も「全ては一本の煙草から始まった」と説明した（2002 年 12 月 2 日インタビュー：ボジョプール県アラの党支部にて）。

42) 前掲『ヒンドゥスタン・タイムズ』紙記者サンジャイ・シン氏へのインタビュー（2002 年 10 月 29 日）。ベラウール村自体は、事件後 1997 年あたりから正常化する。緊張は依然として続くものの、ランヴィール・セナーによる殺人自体は鳴りを潜めていく。前掲指定カースト農業労働者 B 氏によれば、「セナーはよそに出ていった」とのことであった（2003 年 2 月 6 日）。

り返したのだろうか。ベラウル村長によれば、「会議派の時代は、少なくとも命は安全だった。ところが、ラルーがやって来て、生命も財産も危なくなった」。<sup>43)</sup>ここでは、自身の安全と政治変動が直接結びつけられている。それでは、会議派時代のナクサライト対策はどのようなものだったのだろうか。

会議派時代のナクサライト対策に着目すると、たしかにナクサライトの殺害が優先されていたことがわかる。非常事態体制期にはナクサライト討伐のための「雷作戦」が実施され、更に1976年にミシュラ会議派政権は、「反社会的分子」へ対抗措置として、地主個人を武装させる計画を発表する。地主を訓練するための「射撃訓練センター」も設立され、州首相自身が開所式に出席した。<sup>44)</sup>10年後の1986年には、時のドゥベイ会議派政権が、ナクサライトに対抗するために、銃の所持免許を与えることによって地主を武装させる方針を改めて公式に表明している [Kumar, A 2008: 100]。会議派が敗北した1989年下院選挙投票日に起こったダンワール・ビータ (Danwar-Bihta) 虐殺事件に関する報告書も、警察と地主の私兵集団の協力関係を描写している。<sup>45)</sup>警察と地主の協力関係が、明確に存在したといえるだろう。

## 6.2 ビハール州における会議派政治

それでは、そのような警察と地主の私兵集団の結託を生み出した会議派政治とは、どのような性格をもっていたのだろうか。ビハール州においては、1947年の独立以来、1967年から72年にかけての連立政権期、1977年から1980年にかけてのジャナター党政権期を除いて、1990年まで会議派による一党優位支配が続いた。ビハール州は、西隣のウッタル・プラデーシュ州に次ぐ全国第2位の下院議席 (54議席) を保有する大州であり、<sup>46)</sup>ビハールにおける会議派の勝利は会議派の全国支配に大きく貢献してきた。

会議派による支配は、上位カースト地主による支配と特徴づけることができる。<sup>47)</sup>ビハール州は、農村人口の多いインドのなかでも農村人口の比率が高く、2001年の時点ですら約9割が農村に居住しており、<sup>48)</sup>農村の権力構造がそのまま州政治に反映される条件が揃っていたためである。

上位カースト地主支配の起源は、英領時代に遡る。独立運動期に会議派が議会闘争路線を採

---

43) ボジョプール県ベラウル村長 (Mukhiya) シヴ・ヴシャン・チョードリー (Mr. Shiv Vshan Choudhary) に対するインタビュー (2002年12月5日: 氏の自宅にて)。プミハール・カーストの出身である。

44) ダス [Das 1983: 253] 参照のこと。クマールも、同様の指摘を行なっている [Kumar, A 2008: 97]。

45) ダンワール・ビータ事件は、投票日に投票所に出かけようとしたML支持者の指定カースト23名を、上位カーストであるラージプート地主が虐殺した事件である。事件の直後に現場を訪れたパトナイクの報告書には、警察と地主の協力関係が描写されている [Patnaik 1990]。

46) 2000年にビハール州は、ビハール州とジャールカンド州に分離したため、ビハール州の下院議席数は40議席となった。

47) ビハール州における会議派支配の展開については、中溝 [2008a: 第2・3章] で詳述した。本項の記述は、これに従っている。

用するようになると、選挙に勝利するために会議派は土地の有力者の支持を求めようになった。ビハール州において土地の有力者とは、主に上位カースト地主であった。他方、上位カースト地主にとっても、選挙で選ばれる公職は、競争が激化していた官職の限定性ゆえに魅力的なポストであった [Roy 1991: 239-240]。ライバルに勝利するためには有力政党の公認を得る必要があり、ビハール州において有力政党とは、マハトマ・ガンディーの指導する他ならぬ会議派であった。会議派と上位カースト地主の利害は一致し、独立以前からビハール州会議派は上位カースト地主によって支配されるようになる。独立後、普通選挙が導入されたが、政治権力の構造はそのまま引き継がれることとなった。

上位カースト地主による会議派支配を、州議会、会議派議員、会議派州内閣の社会集団構成比を用いて示してみよう。最初に、州議会の社会集団構成を検討してみたい。表6を検討すると、1990年までは上位カースト出身議員が後進カースト出身議員を上回っていることがわかる。

人口比を勘案すると、上位カーストがいかに過剰に代表されてきたか明らかだろう。この傾向は、州議会与党のカースト構成比でも確認することが出来る(表7)。

データが入手可能な範囲で検討すると、会議派政権下の1962年議会、1969年議会、1975年議会のいずれも上位カースト出身議員が後進カースト出身議員を含む他の社会集団をかなりの程度上回っていることがわかる。行政権を掌握する州政府閣内大臣の構成を検討すると、この傾向はより一層顕著になる。

1967年選挙までは、上位カースト出身閣僚が他の社会集団出身の閣僚を圧倒した [中溝 2009a: 372, 表4]。人口比を勘案すると、上位カーストとは対照的に、後進カースト出身閣僚の少なさが際立つ。以後、1990年選挙まで続く会議派政権において、上位カースト出身閣僚は、上位カーストと後進カーストが並んだバグワット・ジャ・アーザード政権(1988年)を例外として、最多数を占め続けた。このように州議会議員、州議会与党、州政府内閣の社会集団構成比から、会議派政権を上位カーストによる支配と特徴づけることに問題はないだろう。

先のカーストと階級の対応関係を考慮に入れると、会議派政権下における上位カースト支配とは、とりもなおさず上位カースト地主支配であった。会議派政権下において、ナクサライト討伐のために警察と地主の私兵集団が積極的に結託したことも、この文脈で理解できる。

ただし、ここでひとつ留保しておきたい。会議派支配において、指定カーストに対する配慮

48) インドは、直近の2001年センサスでも人口の72.2%が農村に居住する農業国としての性格を色濃くもっている。Census of India 2001, *Rural-Urban distribution of population-India and states/Union territories: 2001* 参照 (<http://www.censusindia.net/results/rudist.html>) 2007/9/21 アクセス)。本稿が対象とするビハール州に至っては、実に89.5%が農村に居住しており、ヒマラヤ山麓に位置するヒマーチャル・プラデーシュ州と並んで農村人口比率の最も高い州となっている。そのため、政治権力を獲得するためには、農村部における集票が至上命題となり、農村票の動向が政党政治の動向を大きく左右することになる。



表 6 ビハール州議会におけるカースト構成（上位・後進カースト比較）

カースト	1967	1969	1972	1977	1980	1985	1990	1995	2000	2005
上位カースト	133	122	136	124	120	118	105	56	56	68
後進カースト	82	93	77	92	96	89	117	160	121	112
議会定数	318	318	318	324	324	324	324	324	324	243

出所：2000 年州立法議会選挙までは Srikant [2005: 37], 2005 年（2 月）州立法議会選挙については, Asian Development Research Institute (Patna) 作成の資料を参照し筆者作成.

注) 上段の数字は, 州立法議会選挙が行なわれた年を示す. 2005 年州立法議会選挙は 2 月と 10 月の 2 回行なわれたが, 資料においては 2 月に行なわれた選挙の数値を表示している. 2000 年州立法議会選挙以降, ジャールカンド州が分離したため, 定数は 243 名に減少した.

表 7 ビハール州議会与党のカースト構成比（1962-1995）

	1962 (INC)	1967 (BKD)	1969 (INC)	1975 (INC)	1977 (JP)	1990 (JD)	1995 (JD)
上位カースト	47.8	46.9	44.0	41.2	39.3	24.8	13.2
後進カースト	24.4	29.0	26.9	23.6	25.8	45.5	56.9
ムスリム	8.2	4.9	8.6	10.3	6.5	9.1	7.8
指定カースト	17.4	11.7	12.5	15.5	18.0	19.0	19.2
指定部族	1.1	4.3	7.9	8.8	8.3	1.7	0.6
その他	1.1	3.1	0	0.5	2.3	0	2.4

出所：1962 年選挙から 1977 年選挙までは Blair [1980: 68, Table 4], 1990 年選挙は Srikant [1995: 25-26], 1995 年選挙は, Choudhary and Srikant [2001: 325] より筆者作成.

注) 選挙年の括弧内は政権党を示している. 数値は与党に占める社会集団の比率 (%表示).

(略号) INC: インド国民会議派 (Indian National Congress), BKD: インド革命党 (Bharatiya Kranti Dal), JP: ジャナター党 (Janata Party), JD: ジャナター・ダル (Janata Dal).

がなされなかったわけでは決してない. 会議派政権は, 前述のように独立当初から不可触民と呼ばれた人々を特別に保護すべき対象として指定し, 議員職, 公務員職, 教育機関等に留保枠を設定した. さらに, インディラ・アワーズ・ヨージュナ (Indira Awaz Yojna) などの住宅建設プログラムに代表されるさまざまな便益を提供し, 1980 年代以降は指定カーストに限らない貧農層をターゲットとした補助金政策を強化していった [近藤 1998a, 1998b]. その結果, 会議派の支持基盤はプラスが「端の連合」と呼んだ, 社会階層の最上位である上位カーストと社会階層の最下層である指定カースト, 指定部族, 更に宗教的少数派のムスリムから構成されるようになった.<sup>49)</sup> ビハールでも, 会議派は同様の支持基盤を構成することに成功した

49) プラスは, Brass [1994: 74] においては, 「社会階層の頂点に位置する地主カーストと, 社会階層の底辺に位置する多くの宗教的少数派を含む低カースト, 貧困層, 不利な立場に置かれている者の連合である」としている. カースト制は地域により大きな違いが存在するため一般性をもたせた書き方になっていると考えられるが, この点ジャフルローは, プラスを引用しつつ具体的に特定している [Jaffrelot 2003: 427]. 1980 年代以降, 後進カーストの会議派からの離反が顕著になるが, そうなると残る地主は上位カーストが中心となるので, 筆者もジャフルローと同様に, 具体的に表記した.

[Frankel 1990: 115]. その意味で、会議派の上位カースト地主支配は、指定カーストを優遇した支配だったともいえる。そのような優遇策をとりつつも、上位カースト地主の主導権を他に渡すことはなく、上位カーストの権威と権力に正面から挑んだナクサライトには、弾圧で臨んだ。

### 6.3 後進カーストによる奪権と農村社会の変容

#### 6.3.1 後進カーストによる奪権

農村における上位カースト地主の権力を支えとした会議派支配は、ビハール州において現在では姿を消した。1990年州議会選挙で会議派は敗北し、現在に至るまで一度も過半数を獲得したことはなく、政権を担ったこともない。会議派支配の崩壊とともに上位カースト地主支配は崩壊し、代わりにヤーダヴに代表される上層後進カーストを中心とする後進カーストが奪権した。政治変動を担ったのは、ヤーダヴ出身のラルー・プラサード・ヤーダヴが指導した新党ジャナター・ダル (Janata Dal) であり、ラルーの汚職事件を契機とした1997年のジャナター・ダル分裂後は、ラルー政権の与党となった民族ジャナター・ダル (Rashtrya Janata Dal) であった。<sup>50)</sup> ラルー政権は、1990年から2005年まで15年間続いたが、この間に後進カーストによる権力の掌握は不可逆的に進行した。

州議会のカースト構成から検討しよう。独立後初めて上位カーストと後進カーストの比率が逆転した1990年選挙の次の選挙である1995年州議会選挙においては、後進カースト議員が上位カースト議員を100名以上上回り、格差は決定的となった。この傾向はデータが入手可能な2005年2月州議会選挙まで変わらない(表6参照)。同じく、州議会与党のカースト構成比も1990年州議会選挙で、後進カーストが上位カーストを初めて上回ったが、1995年州議会選挙では後進カーストの優位は更に進んでいる(表7参照)。閣内大臣の構成についても、ラルー政権下において後進カーストの優位は決定的となった[中溝2009a: 372, 表4]。

後進カーストが主導権を握る政権として、ラルー政権は、州政府公務員職留保制度の改定を行ない後進カーストに対する留保枠を拡大した。更に、中央政府レベルでの後進カーストに対する留保制度の実施を提言したマンダル委員会報告の実施を強く支持することにより、後進カーストの支持を獲得していく。他方、上位カーストは、マンダル委員会報告の実施に強く反撥し、1990年にはビハール各地で暴動を引き起こした。公務員職留保制度の実施とこれをめ

50) ジャナター・ダルは、ヴィシュワナート・プラタップ・シン (Vishwanath Pratap Singh) により1988年に設立された政党である。V. P. シンは、国民会議派の有力指導者であったが、時の会議派政権中枢の汚職問題を批判して離党し、ジャナター・ダルを結党した。ジャナター・ダルには、当時野党であった、ジャナター党、会議派 (社会主義者)、ローク・ダル (A)、ローク・ダル (B)、ジャン・モルチャが参加した。ジャナター・ダル結党の詳細については、中溝 [2008a: 252-263] 参照のこと。ジャナター・ダルは、結党の翌年に行なわれた1989年選挙で143議席を獲得し、反会議派連合であった国民戦線の中核として、独立以来2度目となる非会議派政権を樹立した。ラルーは、1996年にジャナター・ダルの総裁に就任したものの、自身の関与が取り沙汰された飼料疑獄の責任を追及され、1997年に民族ジャナター・ダルを結成してジャナター・ダルを分裂させた。

ぐる暴動を契機として、ララー政権下においては上位カーストと後進カーストの亀裂は深まっ  
ていく。<sup>51)</sup>

独立後長らく上位カーストの支配が続いてきたビハールにおいて、後進カーストによる政治  
的奪権は、農村社会にも大きな影響を及ぼすこととなった。ベラウル村ではどのような変化  
が起きただろうか。次に検討してみよう。

### 6.3.2 ベラウル村の変容

最初に経済的側面に関して検討したい。確認しておきたいのは、インドのような低開発国に  
おいて、とりわけ経済成長・経済生活にとって国家の果たす役割が相対的に大きいという事  
実である。この点は多くの論者が指摘しており [Kohli 1992; Chhibber 1999; Chandra 2004;  
Frankel 2005]、近年ではチャンドラがパトロネージ・デモクラシー (Patronage-Democracy)  
という概念を用いてインドの事例を説明しようと試みている。<sup>52)</sup>

それでは、国家とは何か。農村に着目すると、農民にとって一番身近に接する国家機構と  
は、まず郡に設置されている郡開発庁 (Block Development Office) であり、税務署、警察署  
である。その上に位置するのが県庁 (District Magistrate Office) であり、日常的に接する国  
家機構はまず県庁レベルまでといてよい。そこで郡開発庁や県庁に誰が座っているか、彼  
らが誰から命令を受けるか、ということが、役所に出かけた際に重要な問題となる。ベラウ  
ル村のヤーダヴ村民によると、ララー政権の成立は役所の対応に劇的な変化をもたらした。

会議派時代、役人は上位カーストばかりで、われわれが陳情に行くと、「出て行け」と追  
い出したものだ。われわれを全くバカにしていた。ところがララーが政権を取ると、彼らの  
態度が変わった。ララー政権になってから、役人に躊躇しないで話せるようになり、県長官  
(District Magistrate) にも直接会えるようになった。役人が陳情を解決しないときは、「な  
ぜしないのか」と言えるようになった。会議派時代にはおよそ考えられなかったことであ  
る。彼らもわれわれがララーの支持者ということで、椅子を勧めるようになった。<sup>53)</sup>

もちろん役所の対応の変化には、陳情案件や対応する役人の個性の違いなど、他の要素も考  
慮に入れなければならない。しかし、ここにおいては、少なくとも村人の認識のうえでは、政

---

51) 公務員職留保制度の実施とこれに関連した暴動をめぐる政治過程については、中溝 [2008a: 353-415] で詳述  
した。

52) Chandra [2004: 6-7] 参照。彼女の定義に従えば、パトロネージ・デモクラシーとは、「国家が職やサービス  
へのアクセスを独占し、かつ選挙で選ばれた政治家が、国家が任命権をもつ職やサービスを割り振る法の実  
施に決定権をもっている民主主義」を指し、インドはこの一例となる。インドがこの定義に合致するか否かは  
争いのある点だと思うが、国家が職やサービスにとって重要な役割を果たしていることは事実だろう。

53) シュリ・ニワス・シン氏 (Mr. Shri Niwas Singh : ヤーダヴ農民) へのインタビュー (2003年9月17日: ベラ  
ウル村の氏の自宅にて)。

府の交代と役所の対応の変化が直接結びつけられていることが注目に値する。

政治権力の構成の変化が役所の対応の変化を生む、と考えられるのであれば、役所に座っている人の変化も同様に重要な意味をもつだろう。ラー政権時代における州レヴェルの公務員職留保制度の改訂、そして後進カーストに対する中央政府公務員職留保制度の導入は、「上位カーストばかり」の役所が変わり、「われわれの仲間」が役所の椅子に座り始めることを意味した。後進カーストの村人は「われわれの政府」が実現したという実感を強めたと考えられる。次に検討する、自らのカースト出身者が社会的地位の高い職業に就いているという尊厳の感覚もさることながら、農業の技術革新に伴う新品種種子の供与や農業ローンの貸与などの経済的な便益も、上位カースト官僚よりも「われわれの仲間」の方が話を聞いてくれそうである。<sup>54)</sup>

このように、ラー政権の成立は、後進カーストにとって、経済的な保障を強める意味をもっていた。裏返せば、上位カーストにとっては、限られた資源をめぐる競争が激化したことを意味した。

次に社会的側面に関して検討したい。重要なのは、尊厳 (izzat) の意識である。ラー本人によると、上位カーストの態度は次のようなものだった。<sup>55)</sup>

上位カーストの心のなかには、封建的心性 (feudalism) がある。彼らは、自分たちはえらい人間だ、と思っている。これは間違っている。彼らは、「おまえは後進カーストだ、指定カーストだ、ムスリムだ」と言って、後進カーストの耳をつかんで殴っていた。…人びとは、私が上位カーストに反対して叩いていると誤解しているが、そうではない。私は、彼らの封建的心性を変えたいだけである。

そして後進カースト・指定カーストに尊厳の意識を与えることに、ラーは実際成功した。ヤーダヴの知識人であるシャヤマル・キショール・ヤーダヴ元教授 (Prof. Shyamal Kishor Yadav) は、ラー政権は開発には失敗したと留保を付したうえで、次のように述べた。<sup>56)</sup>

大衆が尊厳を取り戻すことについて、ラーは成功した。たとえば、会議派時代には、大学教育の場は、教師・学生など皆、上位カーストにより独占されていた。そして、後進カー

54) ベラウール村民ではない、あるヤーダヴ知識人は、「私はこういう汚い問題には触れたくないが」と断りを入れたうえで、上位カースト役人が上位カーストに便宜を図ったことは事実であり、後進カースト役人が後進カーストに便益を図ることもある程度はあるだろう、と述べた (2004年2月インタビュー)。

55) ラー・ブラサード・ヤーダヴ元州首相に対するインタビュー (2004年3月12日：州首相公邸)。

56) シャヤマル・キショール・ヤーダヴ元教授に対するインタビュー (2004年2月5日)。教授は、ベラウール村から400 kmほど離れたビハール州マデプラ県に居住している。

スト、指定カースト、指定部族は自分の姓を名乗ることが出来なかった。上位カーストの教師から志気を挫かれるからである。しかし、ララー政権になって、ヤーダヴやパスワン（指定カーストであるドウサド（Dusad）の姓：筆者註）など、堂々と姓を名乗ることが出来るようになった。

いまは、人びとは自分のコミュニティに誇りをもっている。この変化はララーが政権を握ってから、起こったものである。B. P. マンダル<sup>57)</sup>も州首相になったが、大衆レヴェルで変化を引き起こすことに成功したのは、ララーである。それゆえ、ビハールは低開発のままだが、人びとはララーを支持している。

この点を、上位カーストの大地主に問うと、次のようになる。

ララーが全ての人に尊厳を与えたなんて、全くの嘘だ。考えてみる。たとえば大学で、先生と生徒がいる。ある日突然、生徒が「自分が先生だ」と言い始めたらどうなるか。ララーは、ダリットに尊厳を与えたと言っているが、作ったのは混乱だけである。ダリットと他のコミュニティの間に混乱を作り出した。そしてこの混乱によってこそ、彼は権力を固めたのである。

（「混乱」というのは、具体的にどういうことですか？：筆者質問）混乱というのは、上位カーストは後進カーストより優れていると考え、後進カーストは上位カーストから独立していると考えていることだ。つまり自分のことを「小さなカースト」（後進カースト・指定カーストのことを指す：筆者註）だと思わない。それゆえ、後進カーストが上位カーストの言うことを聞かない。このような緊張が、ララーが政権を取ってから作り出された。<sup>58)</sup>

ララーが、後進カースト・指定カーストなどの低カーストに尊厳を与えることに成功したことは、上位カースト大地主の苛立ちからも看取することが出来る。後進カーストのみならず、

---

57) B. P. Mandal (Bindeshwari Prasad Mandal) はヤーダヴの出身であり、ビハール州政治史上、後進カースト出身の政治家として初めて州首相に就任した。後に、第二次後進諸階級委員会の委員長として、後進カーストに対する中央政府公務員職の留保制度の実施を勧告する。この報告書は、彼の名前を取ってマンダル委員会報告書と通称され、1990年代のインド政治を動かした3つのMのひとつとされた。3つのMとは、マンダル、マンディール（Mandir：ヒンドゥー寺院）、マーケット（1991年より開始された経済自由化政策）を指す。3つのMについては、竹中 [2005: 8-9] を参照のこと。

58) ビハール州サハルサ県ダボリ村在住のラーズブート大地主に対するグループ・インタビュー（2004年4月25日）。ダボリ村は、B. P. Mandalの生家があるビハール州マデプラ県ムルホ村の近隣である。本来であれば、ベラウール村のプミハール地主から証言を引用すべきだが、前述の事情により、政治的質問を行なうことはかなり困難であった。ただし、インタビューの端々から、ララー政権に対する不満は看取できた。引用したラーズブート地主の認識とかなり共通するという印象を受けたため、ここに引用した。なお、「ダリット」とは、「虐げられた人」を意味し、通常は指定カーストを指して用いられるが、インタビューにおいては後進カースト全体を含めた低カーストを指す意味で用いられていた。

指定カーストもラルーを当初支持したことについては、指定カーストを主要な支持基盤とする ML の幹部も認めた。<sup>59)</sup> それでは、なぜこのような尊厳の意識を後進カーストを中心とする低カーストが獲得することに成功したのだろうか。

大きな要因のひとつとなったのが、先述した公務員職留保制度の実現であった。上位カーストによる社会的支配は、農地所有に代表される経済力と同時に政治権力によって支えられていた。後進カーストの台頭により、立法府の寡占が崩れ、更に公務員職留保制度の導入により行政府の寡占が崩れれば、農村社会における社会的権力の正当性も揺らぎ始めることになる。ラルーがマンダル委員会報告を熱烈に支持したのも、そして上位カーストが暴動を起こして強く反撥したのも、この点を明確に認識していたからこそであった。そして、上位カーストの懸念どおり、ラルー政権の下で農村の社会関係は大きく変わることになった。ベラウル村のヤーダヴ農民の証言を次に引用しよう。<sup>60)</sup>

会議派時代には、上位カースト地主は貧しい人に酷く当たっていた。たとえば、自分の所で働くように言って賃金を払わない。そこで抵抗すると殴る。地主の前で座ることも許されなかった。それが、ラルーがやって来て全てが変わった。ラルーがやって来て、みんな幸せになった。会議派時代は上位カーストが警察を使って冤罪をでっち上げて嫌がらせをし、後進カーストのなかに優秀な子どもがいると、役人にならないように勉強の邪魔をした。今は警察はラルーが握っているから、貧しい人に嫌がらせをすることは出来ない。

この証言からは、ラルー政権支持者の発言であることを割り引いても、農村社会の変化を的確に把握することが出来る。「会議派時代は上位カースト地主の前で座ることが許されなかったが、ラルー政権になって座ることが出来るようになった」という「椅子」問題は、ベラウル村に限らず他の村でも多くの後進カースト、とりわけヤーダヴ農民が語る話であり、社会的変化の象徴的な役割を担っている。<sup>61)</sup>「勉強の邪魔」からは、「役人」のもつ影響力の大きさ、すなわち公務員職留保問題が農村社会にもつ影響の大きさを推測することができ、「冤罪」からは政治権力、とりわけ警察を掌握する重要性を村人が認識していることが伺える。

このように、政治権力の構成の変化、すなわち立法府の構成の変化に引き続く行政府の変化

59) 前掲 ML 幹部プラディープ・ジャ氏は、「われわれも、このラルー現象で支持基盤をもっていかれたが、彼の嘘がわかると貧困層はわれわれのところに戻ってきた」と述べた (2002 年 10 月 24 日インタビュー：党ビハール州本部にて)。同様の点を指摘した研究として、Gupta [2001: 2744] 参照。

60) ベラウル村ヤーダヴ農民に対するインタビュー (2003 年 2 月 5 日：氏の自宅にて)。

61) たとえば、ボジョプール県から 400 km ほど離れたマデブラ県でも同様の話を聞くことが出来た。ビハール州マデブラ県ムルホ村におけるヌヌラル・ヤーダヴ氏 (Mr. Nunulal Yadav：ヤーダヴ農民) に対するインタビュー (2004 年 4 月 14 日：氏の自宅にて)。

は、農村社会を大きく変えることになった。この変化は、ランヴィール・セーナー結成の経緯と照合した場合、ブミハール地主の認識にどのように反映されているだろうか。次に検討してみよう。

#### 6.4 政府・警察への不信

後進カーストによる奪権は、上位カースト、ここではブミハールの政府に対する認識に変化をもたらすこととなった。前述のランヴィール・セーナー司令官ブラフメシュワール・シンによると、政府は彼らの敵になった。「警察はララーの命令を受け、われわれを守ってくれなかった。だから自衛せざるをえなかった」。<sup>62)</sup>ランヴィール・セーナーはそのための組織だと正当化するわけであるが、確かにララーは、1992年7月に州議会において「仮に農業労働者や土地なし農民（農業労働者）が農地を占拠しても、警察は発砲しない」と言明している [Louis 2002: 139]。彼が演説において最も強調するのは「貧乏人の息子」という出自であり、だからこそ「貧乏人の心がわかる」という訴えである。インタビューにおいても、「自分は生まれながらにしてのナクサライトだ」と述べた。<sup>63)</sup>左翼過激派に対する態度に、少なくとも言葉のうえでは会議派政権と大きな違いが生じたといえる。それではベラウール村の事例について、関係の変化をどれほど客観的に示すことができるだろうか。検討してみよう。

まず、強制労働を強いられていたディーパの事例だが、仮に会議派時代であれば、ディーパの救済は無視されていた可能性が大きい。それが警察、さらに郡開発官までやって来てこれを救済するわけであるから、ブミハール地主にしてみれば、「奴らの味方をした」ということになる可能性は高い。

より問題なのは、タバコ屋事件後の監禁である。ブミハールは誘拐の被害届けを警察に提出し、警察は前述のように指定カースト集落であるチャカルダ集落を捜索するが、救出に失敗するばかりか、指定カーストによる殺害を結果として招いている。会議派時代であれば、指定カーストが誘拐したとわかった時点ですでに何人かの指定カーストを殺害していてもおかしくない。ブミハールにしてみればなんとも生ぬるい対応といえるだろう。

9月18日のMLの大集会も、問題となる。ランヴィール・セーナーの脅しに対して、警察は指定カーストを護衛して家まで送り届けるわけだが、ブミハール地主にしてみれば、「守られるべきは、仲間を殺されたわれわれのほうだ」と憤慨しても無理はない。9月28日から始まる銃撃戦においても警察の対応は曖昧である。ランヴィール・セーナーの発砲を制止するで

---

62) 前掲ブラフメシュワール・シンへのインタビュー（2002年11月5日）。

63) 前掲ララー元州首相へのインタビュー（2004年3月12日）。もともと直後に「ただし非暴力のナクサライトだ」とやや慌てて留保を付けた。インタビューにおいても、側近に促される形で幼い頃の厳しい労働で失われた足指の爪を示し、2004年下院選挙でマデプラから立候補した際の出馬表明演説は「貧乏人の皆さん」という呼びかけから始まった。1990年に州首相に就任したときに住んでいたのは、パトナ大学で小間使いとして働く兄弟の官舎だった。次のインタビュー記事 “No one dare topple me,” [India Today, March 31, 1990] も参照のこと。

もなければ、指定カーストの抵抗を妨げもしない。MLの指導者であり元下院議員・元州議会議員であるラメシュワール・プラサードによれば、「警察はレフェリーの様な存在だった」。<sup>64)</sup>

最後の局面では、警察は指定カーストの安全を確保するために車両を準備して移動を手伝っているが、ブミハール地主にすれば利敵行為にみえても全くおかしくない。先述のように、報道は未確認情報としてブミハール地主が警察車両に発砲したと報じているが、ブミハール地主の心理をこのように推測すると、あながち誤報だと断定できない。

では、役所はどうだろうか。ラーが政権を掌握してから、役所の重要ポストに後進カースト出身者の配置を開始したことは前述した。ベラウル村に一番身近な郡開発庁についてはどうだろうか。タバコ屋事件発生当時、郡開発室長(BDO)はヤーダヴ、徴税担当官(CO: Circle Officer)は、指定カーストのチャマルである。彼らが上位カーストではないからといって、ブミハールに不利益な扱いをしたという証拠はないが、ブミハールの心理に何らかの影響を与えた可能性は存在する。

では、当の役人はどう認識しているだろうか。警察、役所の対応について、ボジョプール県長官サンジャイ・クマールは、会議派政権時代とラー政権時代では変化が起こったことを認めた。<sup>65)</sup> 彼によれば、ナクサライトの問題について、会議派時代は「法と秩序(Law and Order)」の問題としてナクサライトを殺害することに専念してきたけれども、ラーが政権を掌握してから対応を変えた。すなわち、殺すだけでは駄目で、農地改革を進展する方向で解決しなければ本当の解決にはならないと認識するようになり、役所もそのように対応を変えたということであった。少なくとも当事者の証言からは政府の対応の変化を裏付けることができる。

## 6.5 頼れない政治家

警察も役人も頼れない、となった時に駆け込む先は政治家である。ではベラウル村のブミハールにとって、政治家は頼れる存在だっただろうか。ビハール州全体の政治的变化はすでに検討したとおりであるが、ここでは地域で起こった政治的变化を検証したい。

全国でもビハールでも会議派が敗れた1989年選挙において、アラ下院選挙区では、前述のMLに所属しているラメシュワール・プラサードが初当選を果たす(表8)。

1989年下院選挙は、1982年頃から次第に議会闘争路線に転換したMLが、インド人民戦線(IPF: Indian People's Front)という政党名を掲げて本格的に戦った初めての下院選挙であった。<sup>66)</sup> ナクサライト出身者の初当選が、ブミハールのみならずアラ選挙区内の上位カース

64) 前掲ラメシュワール・プラサード氏に対するインタビュー(2005年3月7日)。ただし、直後に、「ランヴィール・セナー側のレフェリーだった」と付け加えた。彼は当時、ベラウル村で、戦闘の指揮を執っていた。

65) ビハール州ボジョプール県長官(District Magistrate, Bhojpur District) サンジャイ・クマール氏(Mr. Sanjay Kumar)に対するインタビュー(2003年9月7日: 県長官公邸にて)。

66) MLが議会闘争路線に転換した経緯については、中溝[2009a]で検討した。



表8 アラ下院選挙区の選挙結果

	1984年	1989年	1991年	1996年	1998年	1999年
当選者	B. R. バガット (B. R. Bhagat) 53.19 (INC)	R. プラサード (R. Prasad) 32.65 (ML)	R. L. S. ヤーダヴ (R. L. S. Yadav) 40.91 (JD)	C. D. P. ヴァルマ (C. D. P. Verma) 30.13 (JD)	H. P. シン (H. P. Singh) 39.41 (SAP)	R. P. シン (R. P. Singh) 38.74 (RJD)
次点	N. アフマッド (N. Ahmad) 16.92 (LKD)	T. シン (T. Singh) 29.64 (JD)	S. シン (S. Singh) 32.69 (JP)	R. P. シン (R. P. Singh) 23.69 (SAP)	C. D. P. ヴァルマ (C. D. P. Verma) 31.41 (RJD)	H. P. シン (H. P. Singh) 25.21 (JDU)
三位	C. D. P. ヴァルマ (C. D. P. Verma) 10.65 (JNP)	B. R. バガット (B. R. Bhagat) 22.97 (INC)	R. プラサード (R. Prasad) 17.43 (ML)	R. プラサード (R. Prasad) 19.55 (ML)	K. D. ヤーダヴ (K. D. Yadav) 22.57 (ML)	R. プラサード (R. Prasad) 20.82 (ML)

出所：選挙管理委員会資料より筆者作成。

注) 上段は候補者名，下段は得票率，所属政党（括弧内）の順に表示。

（略号）INC：インド国民会議派（Indian National Congress），LKD：ローク・ダル（Lok Dal），JNP/JP：ジャナター党（Janata Party），ML：インド共産党（マルクスレーニン主義）解放派（Communist Party of India (Marxist-Leninist) Liberation），JD：ジャナター・ダル（Janata Dal），JD (U)：ジャナター・ダル（統一派）（JD (U)），RJD：民族ジャナター・ダル（Rashtriya Janata Dal），SAP：サマタ党（Samata Party）。

ト地主に衝撃を与えたことは想像に難くない。前述したダンワール・ピータ虐殺事件を検証するために、当選したラメシュワール・プラサードがIPF党首クリシュナ・デオ・ヤーダヴ（Krishna Deo Yadav）とともに村を訪問した際、上位カースト地主は彼らに発砲して暗殺を試みた。<sup>67)</sup> 下院選挙の3ヵ月後に行なわれた1990年州議会選挙において、上位カースト地主はMLを打倒するために党派の違いを乗り越え、最も勝てる候補に投票したといわれている[Bharti 1990: 981]。上位カーストの団結は1991年下院選挙でも揺るがず、本来は敵であるはずのジャナター・ダル候補でありヤーダヴ出身のラーム・ラッカン・シン・ヤーダヴ（Ram Lakhan Singh Yadav）をこぞって応援したとされる。<sup>68)</sup> その結果、ラメシュワール・プラサードは3位で落選した。

ただ、村にとって身近な政治家は国会議員よりは州議会議員である。そこで州議会議員について示したものが、表9である。

1985年州議会議員選挙で当選したのはローク・ダル所属でヤーダヴ出身のソナダーリ・シン（Sonadhari Singh）であったが、1990年選挙でも同じソナダーリ・シンがジャナター・ダルから当選を果たしている。ソナダーリ・シンはララー政権において森林大臣に任命されるが、大臣就任後ベラウール村を訪れた際に、ブミハールに取り囲まれてサンダルで殴られた。

67) Bharti [1990: 981] 参照。暗殺の標的となったラメシュワール・プラサード氏は、「自分は上位カーストと戦っており、彼ら地主の友達ではなかった。だから彼らは何回も自分を殺そうとした。しかし、自分は人民とともにあり、人民はいつも自分を守ってくれた」と証言した。2005年3月7日ビハール州パトナML党宿舎におけるインタビュー。

68) 前掲ラメシュワール・プラサード氏に対するインタビュー（2005年3月7日）。

表9 サンデーシュ州議会選挙区選挙結果

	1985年	1990年	1995年	2000年
当選者	ソナダーリ・シン (Sonadhari Singh) 36.01 (LKD)	ソナダーリ・シン (Sonadhari Singh) 31.46 (JD)	R. プラサード (Rameshwar Prasad) 34.23 (ML)	V. K. S. ヤーダヴ (Vijendra. K. S. Yadav) 41.52 (RJD)
次点	シドナート・ロイ (Sidnath Roy) 31.15 (INC)	K. D. ヤーダヴ (K. D. Yadav) 25.73 (ML)	シドナート・ロイ (Sidnath Roy) 19.58 (IND)	ソナダーリ・シン (Sonadhari Singh) 28.35 (SAP)
三位	シェオジー・シン (Sheojee Singh) 20.13 (IND)	シドナート・ロイ (Sidnath Roy) 24.37 (INC)	ソナダーリ・シン (Sonadhari Singh) 15.59 (JD)	R. プラサード (Rameshwar Prasad) 25.21 (ML)

出所：選挙管理委員会資料より筆者作成。

注) 上段は候補者名，下段は得票率，所属政党（括弧内）の順に表示。

(略号) INC：インド国民会議派 (Indian National Congress), LKD：ローク・ダル (Lok Dal), ML：インド共産党 (マルクスレーニン主義) 解放派 (Communist Party of India (Marxist-Leninist) Liberation), JD：ジャナター・ダル (Janata Dal), RJD：民族ジャナター・ダル (Rashtriya Janata Dal), SAP：サマタ党 (Samata Party), IND：無所属 (Independent)。

「違う党であったし、ヤーダヴだったから」というのが理由であるが、ブミハールの反撥の強さを示すエピソードである。<sup>69)</sup> 1990年代前半までベラウールのブミハールは会議派支持であったとされるが、<sup>70)</sup> 議席においては1980年代後半から会議派の影は薄くなったことがわかる。

挙句の果てに1995年選挙では、MLの元国会議員ラメシュワール・プラサードが州議会議員として当選を果たす。ベラウール村で活動していたML活動家のヴィルバル・ヤーダヴによれば、村での一連の事件におけるMLの活躍が勝利に貢献したとのことであったが、それを裏付けるようにベラウール村での投票所占拠も際立っていた。ランヴィール・セナーは投票所となった中学校 (Middle School) を占拠して、ラグニプール (Ragnipur) 集落のヤー

69) ベラウール村ブミハール地主マノジ・クマール・チョードリー (Mr. Manoj Kumar Choudhary) に対するインタビュー (2003年8月25日：氏の自宅にて)。

70) ベラウール村パンチャーヤット議員 (ward no. 7選出) プーナム・デヴィ氏 (Ms. Poonam Devi) (ブミハール出身)、氏の夫であるヴィノド・チョードリー (Mr. Vinod Choudhary) 氏による分析 (2003年2月3日インタビュー：氏の自宅にて)。彼らによると、ベラウールのブミハールは、1991年下院選挙は会議派を支持したが、1995年州議会選挙ではサマタ党を支持し、1996年下院選挙ではBJP連合を支持した。ただし、1995年州議会選挙においてベラウール村が属するサンデーシュ選挙区でサマタ党が獲得した票数は361票に過ぎず、この点に関する信憑性は低い。

1994年の事件に関連して逮捕された経験を持ち、ランヴィール・セナーを支持するブミハール地主も、会議派からインド人民党へと支持政党を変更したことを言明した (2002年12月11日インタビュー：氏の自宅にて)。ベラウール村パンチャーヤット議員 (ward no. 18選出) でバラモン出身であるアニル・ドゥベイ氏 (Mr. Anil Dubey) も、1990年代前半までは会議派支持者であったが、現在はインド人民党連合支持者になったと述べた (2003年8月27日インタビュー：氏の自宅にて)。なお、有権者の政党支持の変化については、前述の制約から、極めて限定的な形でしか行なえなかったことを改めて付言しておきたい。

ダヴは投票することができなかった。<sup>71)</sup>しかしブミハールの懸命な努力にもかかわらず、ラメシュワール・プラサードは当選を決め、当選直後にランヴィール・セナーは司令官ブラフメシュワール・シンの出身村であるコピラ (Khopira) 村で指定カーストの虐殺を実行した。<sup>72)</sup>以後、冒頭で紹介したように、2000年州議会選挙後まで虐殺を繰り返してゆく。2002年にはブラフメシュワール・シンがようやく逮捕され、現在では活動は下火となっているものの、犠牲となった貧農は、累計300名に達した。

## 6.6 1995年州議会選挙の意味

MLの議員が誕生したことが、ベラウル村のブミハールをはじめとする上位カーストにとって脅威となったとしても、ビハール州全体ではML所属の議員は6名に過ぎなかった。しかし、ランヴィール・セナーは、活動の範囲を、ボジョプール県を超えて中部ビハールに拡大していく。最も活発に活動したのは、1995年州議会選挙後から2000年州議会選挙後までの5年間であったが、なぜこの期間だったのだろうか。活動活発化の契機となった1995年州議会選挙とは、どのような意味をもっていただろうか。検討してみよう。

1995年州議会選挙は、ラルー政権が権力基盤を固めた選挙であった。1990年州議会選挙は第一党として勝利したとはいえ、ジャンター・ダルは122議席を獲得したに過ぎず、過半数の162議席に40議席届かない少数内閣としての出発だった。中央のジャンター・ダルの分裂によりさらに勢力を縮小させつつも、合従連衡により任期を全うした際どい政権運営を強いられていた。ところが1995年州議会選挙では、ジャンター・ダル単独で167議席を獲得し、過半数を上回った。1995年議会在後進カーストの優位を決定づけた議会であったことは前述したが、与党ジャンター・ダルにおいても、167名中95名は後進カースト出身議員が占め、なかでもヤーダヴは63名と最大勢力となった [Choudhary, P. K. and Srikanth 2001: 325]。ジャンター・ダルは、「ヤーダヴの党」としての性格をますます強めていくこととなった。

このように、現在から振り返ると、1995年州議会選挙はラルーが政権基盤を固めた選挙であるが、当時は会議派政権の復権に望みがかけられた選挙でもあった。上位カースト有権者の投票行動について、標本調査を検討してみよう。

1995年州議会選挙においては、上位カーストのなかで最も多いほぼ4割近くが、依然として会議派を支持していることがわかる。ところが、会議派は、29議席とさらに議席を減少させ、政権奪還どころか、議員定数324名の1割を割り込む惨敗だった。選挙結果の衝撃は深かったと考えられ、翌年に行なわれた1996年下院選挙より、上位カーストは会議派に見切りをつけ、勝てる政党としてのインド人民党<sup>73)</sup>連合に支持を変更していく。

選挙のレヴェルが異なることに注意しなければならないが、1996年下院選挙では、上位カー

71) 前掲ヤーダヴ農民に対するインタビュー (2003年2月5日)。

72) 前掲 ML 活動家ヴィルバル・ヤーダヴ氏に対するインタビュー (2003年9月16日)。

表 10 ビハール州における上位カーストの支持政党の変遷 (1995-1998)

	1995 年州議会選挙	1996 年下院選挙	1998 年下院選挙
会議派	39.1	10.1	8.7
インド人民党連合	16.5	59.5	77.6
ジャナター・ダル連合	20.9	29.1	11.6
民族ジャナター・ダル	—	—	*

出所：Singh, V. B. [1995: 101], Kumar, S. [1999: 2477] より筆者作成。

注 1) 「\*」は negligible, 「—」はデータ不在。

注 2) 1995 年州議会選挙の調査は発展途上社会研究センター (CSDS: Centre for the Study of Developing Societies) の調査として、選挙期間中の 1995 年 3 月 5 日から 15 日の間と最終投票日 3 月 25 日の 2 週間前 (3 月 11 日) から 1 週間前 (3 月 18 日) にかけて行なわれた。324 選挙区の内 16 選挙区が抽出され、更に各選挙区につき 3 つの投票所が抽出された (合計 48 投票所)。対象者は無作為抽出によって 1,536 名が選ばれ、対面調査方式により 817 名から回答を得ることが出来た。回答者の内、45% は女性であり、87% は農村部居住の有権者である。

1996 年・1998 年下院選挙調査は、同じく CSDS の 1996・1998 年全国選挙調査として行なわれた。パネル調査として行なわれ、対面調査方式が取られた。サンプル数は、1996 年調査が 880 名、1998 年調査が 833 名である。1998 年調査においては、新たな有権者も付け加えられた。Kumar, S. [1999: 2480, Notes2], Nigam and Yadav [1999: 2391-2392] 参照のこと。

注 3) 数値は各党に対する支持率 (% 表示) を示す。たとえば、1995 年州議会選挙では上位カーストの 39.1% が会議派を支持した。

注 4) 政党連合について、1995 年州議会選挙では、BJP は連合を組まず、単独で戦った。1996 年・1998 年下院選挙では、BJP とサマタ党が連合を組んだ。ジャナター・ダル連合は、1995 年州議会選挙では、ジャナター・ダル (JD) とインド共産党 (CPI)、インド共産党 (マルキスト) (CPM) が連合を組んだ。1996 年下院選挙では、JD と CPI、CPM、ジャールカンド解放戦線 (ソレン派) が連合を組み、1998 年下院選挙においては、JD と CPI、CPM が連合を組んだ。民族ジャナター・ダル (RJD) は、ラルーの汚職事件をめぐる、1997 年に JD からラルー派が離党して作られた政党である。

ストの約 6 割が BJP 連合を支持したのに対し、会議派を支持した有権者は約 1 割に過ぎない。前年からの劇的な減少である。次の 1998 年下院選挙ではさらにその傾向が強まり、約 8 割が BJP 連合を支持する一方、会議派支持は 8.7% にとどまった。1999 年下院選挙、2000 年州議会選挙については、上位カースト総体としてのデータが示されていないため単純な比較は行なえないが、およそその傾向に変化はない。<sup>74)</sup> このように、1995 年州議会選挙は、後進カースト

73) インド人民党 (Bharatiya Janata Party: BJP) は、1980 年に結党された政党である。前身は、1951 年に結成されたジャン・サンである。「ヒンドゥー民族」から構成される「ヒンドゥー国家」の建設を目指す民族奉仕団 (RSS: Rashtriya Swayamsevak Sangh) の下部組織としての性格をもつ。インド人民党も「バラモンとパニアの党」といわれるように上位カーストが長らく支配的な地位を占めてきたため、上位カーストにとって重要な選択肢となった。インド人民党に関する詳細な研究として、Jaffrelot [1996] を参照のこと。

74) 1999 年下院選挙については、CSDS Team [1999: 36]、2000 年州議会選挙については、Kumar, S [2000: 29]、2004 年下院選挙については、Yadav [2004: 5511, Table 3] を参照のこと。もっとも、最近発表されたサンジャイ・クマールの研究によれば、上位カーストの BJP 連合支持率は、1999 年下院選挙が 71%、2000 年州議会選挙が 49%、2004 年下院選挙が 63%、2005 年 2 月州議会選挙が 50%、2005 年 10 月州議会選挙が 65%、2009 年下院選挙が 65% となっている [Kumar, S 2009: 142-143]。ただし、1996 年下院選挙の支持率は 77%、1998 年下院選挙の支持率は 75% となっており、表に引用した数値とは異なっている。近年のデータには、政党連合の変遷などの情報が何も記されておらず、単に「ジャナター・ダル (統一派) + インド人民党」と記されているだけであるので、参考として例示するにとどめておきたい。

による奪権という政治的現実を上位カーストが受け止め、支持政党を変更する契機となった重要な選挙であったといえる。そして、後進カーストの支配が盤石なものとなったからこそ、ランヴィール・セナーが活動を活発化させたと考えられる。

### 6.7 ランヴィール・セナーの出現

ビハール史上最も組織的に虐殺を実行したランヴィール・セナーは、なぜ1990年代後半に暗躍したのか。これまでの研究が十分に説明してこなかった点を解明するために、ランヴィール・セナー発祥の地であるベラウル村において、ランヴィール・セナー結成の起源を探ってきた。加えて、ビハール州における1990年代の政治変動が農村社会に与えた影響も検討してきた。その結果、以下のことがわかった。

まず第一に、貧農を組織する政党が村の外から入ってきたことは重要だった。MLがベラウル村での活動を開始し、指定カースト貧農の信頼を勝ち得、彼らを団結させたことの意義は大きかった。ブミハール地主の社会経済的抑圧に対し、ストライキを含む組織的な抵抗を行なったことにより、ブミハール地主の危機感は高まっていった。

第二に、ブミハール地主の危機感を更に強めた要因として、1990年代の政治変動は重要である。上位カースト地主の観点からは、会議派政権時代は、ナクサライトの活動は政府が弾圧してくれた。ところが1990年州議会選挙でラルー政権が成立すると、政府の対応に変化が起り始める。ラルーは議会で「農業労働者が農地を占拠しても、警察は発砲しない」と会議派時代には考えられなかった発言を行ない、「貧乏人の救世主」であることをアピールした。

上位カーストの封建的心性を糾すことを訴え、後進カーストに対する公務員職留保制度の実施を活用して、立法府のみならず行政府にも後進カーストの優位を確立しようと試みるラルー政権の存在は、上位カーストにとって脅威であった。同時に、上位カーストのなかに、権力から次第に疎外されていく実感を生み出したことは想像に難くない [Gupta 2001: 2743, Table 2]。ベラウル村のブミハールにとって、この脅威と疎外感が現実のものとして認識されたのが、1994年に起こった一連の事件だった。警察は必ずしもブミハール地主側に立った行動を取らず、よりによって社会の最下層に位置する指定カーストに、ブミハール地主が殺害されてしまった。警察が頼りにならない以上、自衛の必要性を痛感したと思われる。ランヴィール・セナーの指導者ブラフメシュワール・シンが、「警察がラルーの命令を受けて動かないのであれば、MLの暴力から身を守るために、自衛組織を作る他はない」と述べたのはこの文脈で理解できる。<sup>75)</sup> 地元のスニル・パンデヤ、ベラウルから400 km離れたコシ地域を拠点とするアナンド・モハンなどのグンダー政治家が、遠距離をものともせず駆けつけたのも、同様に理解できる。

---

75) 前掲ランヴィール・セナー指揮官ブラフメシュワール・シンへのインタビュー (2002年11月5日)。

ベラウル村のある指定カーストは、「ヤーダヴには民族ジャナター・ダル (RJD) がいて、我々には ML がいる。プミハールには誰もいないので、ランヴィール・セーナーを作った」と述べたが、<sup>76)</sup> ラルー政権下で起こった変化を的確に捉えている。会議派支配の打倒を叫んで政権を獲得したラルー政権は、上位カーストからの奪権を着々と進めている。上位カーストがラルー政権打倒の期待をかけた 1995 年州議会選挙は、無惨な敗北に終わった。上位カーストが権力を奪い返すどころか、逆にラルー政権は盤石の基盤を固めた。ベラウル村では投票所を占拠して、ML の候補者を当選させないための懸命の努力を行なったにもかかわらず、サンデー選挙区では ML 指導者であり、1994 年の一連の事件を指導したラメシュワール・プラサードが当選を果たす。議会政治に希望が見いだせない以上、暴力で目的を果たす他はない。この認識が、1995 年州議会選挙後、ランヴィール・セーナーが活動を活発化させた要因だと考えられる。

このように、ビハール州の政治変動、なかでも、クマールが言及していない警察・県庁などの行政機構の対応の変化、さらに 1995 年州議会選挙を契機とした投票行動の変化などを組み込むことによって初めて、1990 年代後半という特定の時期に、ランヴィール・セーナーが虐殺を組織的かつ継続的に実行していったことの原因を明らかにすることができる。それでは最後に、民主制の下で私兵集団が暗躍することの意味について考えてみよう。

## 7. 民主主義と暴力

1990 年代のビハールは、民主化の時代だった。一時期の例外を除き民主制を維持してきたインドにおいて、ここでいう民主化とは比較政治学で通常用いられる体制変動としての民主化を意味しない。政治権力の中心が社会階層の上層から下層に移行し、不平等が構造として組み込まれていた社会がより平等な方向に変化し始めたという意味での民主化である。本稿では詳述できなかったが、ビハールのこのような民主化は、選挙で多数を得た政治勢力が政治権力を獲得するという民主制の実践によって可能になった。<sup>77)</sup>

クマールが指摘したように、ランヴィール・セーナーの出現は、1990 年代の民主化に抗うひとつの象徴的な表現だったといえるだろう [Kumar, A 2008: 177]。ホブズボームは、盗賊集団の発生期について、歴史的に最も遠い時期だと思われがちではあるが、実はそうではない、と述べている。なぜなら、盗賊は、階級的に未分化な社会が階級分化を余儀なくされる状況のみならず、伝統的な農村階級社会が資本主義的な変化や近代国家に直面し、変化への抵抗を試みる場面でも多発しうるからである。<sup>78)</sup> ランヴィール・セーナーは、ホブズボームの主題

76) ベラウル村指定カースト農業労働者 E 氏に対するインタビュー (2003 年 2 月 9 日：氏の自宅にて)。

77) この過程については、中溝 [2008a] で詳細に検討した。

78) Hobsbawm [2000: 8-9] 参照。ホブズボームの議論の鮮やかな要約として、竹中 [2009a: 71-73] を参照のこと。

である社会的な盗賊 (social bandits) とは性格が異なるが、国家による統制の及ばない、特定の目的をもつ武装集団という点では共通している。1990年代のビハールは、政治・社会的な民主化という近代的な変化を経験し、伝統的な農村社会も大きな変化を余儀なくされた。ランヴィール・セナーもこの民主化のなかから誕生したといえる。

それでは、民主制の実践によって生じた政治・社会の民主的变化は、300名に上る貧農の虐殺という荒廃に帰結するのだろうか。ララー政治がもたらしたものは、社会の混乱に過ぎないと断じるラージプート大地主のように、民主制の実践は、社会紛争の暴力化を招いたに過ぎないのだろうか。

ランヴィール・セナーの展開、さらにその後のビハール州政治の展開を観察すると、そうではないと指摘できる。活動の初期にプミハール・カーストを超えて上位カーストの広い支持を集めたランヴィール・セナーは、1997年12月に貧農61名を殺害したラクシュマンプール・バセ村の虐殺を契機として、次第に支持を失っていった。<sup>79)</sup> 犠牲者が二桁となる大きな虐殺は、2000年州議会選挙後の2000年6月を最後に姿を消し、2002年の指揮官ブラフメシュワール・シンの逮捕をひとつの区切りとして活動は下火になっていった。

上位カーストによるランヴィール・セナーに対する支持は低下しても、ララー政権と政権を激しく競ったインド人民党連合に対する支持は低下しなかった。<sup>80)</sup> あくまでも議会制民主主義の枠内で、投票箱のなかでララー政権に反対したのである。逮捕時までに250名を超える貧農を殺害したブラフメシュワール・シンですら、2004年下院選挙にアラ下院選挙区から立候補して、3位となっている。<sup>81)</sup>

闘争は、銃器を手に取った殺し合いではなく、一人一票を投じる選挙戦に回帰していった。その結果が、2005年州議会選挙におけるララー政権の敗北と、BJP連合の勝利であった。ヤーダヴと同じく上層後進カーストに属するクルミ出身のニティーシュ・クマールが率いるジャンター・ダル(統一派)とBJPの連立政権は、後進カーストが主導権を握っているという意味では、ララー政権が生み出した民主化の流れを継承している。しかし、同時に、上位カーストの利益も、ララー政権期よりは反映されるようになった。<sup>82)</sup> クマールによれば、ニティーシュ政権が成立した2005年より、ランヴィール・セナーによる虐殺は起きておらず、活動の更

79) ラクシュマンプール・バセ村の虐殺については、Bhatia [1997] を参照のこと。この事件を契機にランヴィール・セナーが支持を失っていった点については、前掲『ヒンドウスタン・タイムズ』紙記者サンジャイ・シン氏に対するインタビュー(2002年10月29日)。

80) 前述のようにサンジャイ・クマールによれば、上位カーストのインド人民党連合に対する支持率の最低は2000年州議会選挙の49%であり、BJP連合がララー政権を打倒した2005年10月州議会選挙では65%、直近の2009年下院選挙でも65%の上位カーストがBJP連合を支持している。Kumar, S [2009: 142-143] 参照のこと。

81) ブラフメシュワール・シンは、無所属で立候補し14万8,973票を獲得した。当選は29万9,422票を獲得したRJD候補のカンティ・シン(Kanti Singh)、次点はMLのラム・ナレーシュ・ラム(Ram Naresh Ram)で14万9,679票だった。ML候補には、わずか706票差まで肉薄した。筆者がインタビューした際には、出馬の可能性を笑って否定していた。前掲2002年11月5日インタビュー。

なる縮小が予想される [Kumar, A 2008: 166]. 民主制のもつ力は、それほど強いといえるだろう。

紛争を制度的かつ非暴力的に解決することが、民主主義の重要な機能のひとつであると冒頭で指摘した。農村における殺し合いの激化を招いたのは、民主制が生み出した政治・社会の民主化であったが、殺し合いを収束させたのも、民主制であった。60年に及ぶインド民主主義の実践は、大きな政治・社会的変化を生み出し、これに伴う紛争の暴力化も経験したことは事実である。同時に、ランヴィール・セナーの事例が示すように、暴力の連鎖を喰い止める力も持っている。この意味で、ランヴィール・セナーの出現と衰退は、インド・デモクラシーの可能性を示している。本稿においては、ランヴィール・セナーの事例に焦点を絞って論じたが、宗教暴動など、より規模の大きな陰惨な暴力も存在する。これらについては今後の研究課題としたいが、民主主義と暴力の関係を考えるうえで、ランヴィール・セナーがひとつの重要な手がかりを与えてくれることは、確かである。

#### 謝 辞

本稿は、東京大学政治史研究会（2003年10月25日）における発表「地主と虐殺—会議派支配崩壊後の農村政治 インド・ビハール州の事例」を下に執筆したものである。その後、アジア経済研究所「インド民主主義体制のゆくえ」研究会（2007年8月4日）、国立民族学博物館共同研究「マオイスト運動の台頭と変動するネパール」研究会（2008年12月13日）でも発表の機会をいただいた。馬場康雄先生、中里成章先生、押川文字先生、藤原帰一先生、竹中千春先生、近藤則夫先生、南真木人先生をはじめとする先生方には大変貴重な助言をいただいた。加えて、匿名のレフェリーの先生方にも大変貴重なコメントをいただいた。インドにおける調査に関しては、ネルー大学教授アフマッド先生 (Prof. Imtiaz Ahmad)、チェノイ先生 (Prof. Kamal Mitra Chenoy)、デリー大学教授ヴァナイク先生 (Prof. Achin Vanaik)、アジア開発調査研究所 (Asian Development Research Institute: ADRI) のゴーシュ博士 (Dr. Prabhat P. Ghosh)、グプタ博士 (Dr. Shaibal Gupta)、パトナ大学のシャルマ教授 (Prof. Ram Naresh Sharma) に大変お世話になった。とりわけグプタ博士、シャルマ教授には、ブラフメシュワール・シンへのインタビューをアレンジしていただき、シャルマ教授には、ベラウル村への初訪問時に同行していただいた。紙幅の関係上、お名前を挙げるのでできなかった方も含めて、この場を借りて深く感謝申し上げたい。なお、調査期間中は、2000年度文部科学省アジア諸国等派遣留学生、2003年度日本学術振興会特別研究員 (PD) としてご支援を頂いた。深く感謝申し上げたい。本文中の誤りは、いうまでもなく私の責任である。

#### 引用文献

##### 日本語文献

近藤則夫. 1998a. 「インドにおける総合農村開発事業の展開 (I) —総合的地域開発計画から貧困緩和事業へ」『アジア経済』XXXIX-6 (1998.6) : 2-22.

\_\_\_\_\_. 1998b. 「インドにおける総合農村開発事業の展開 (II) —総合的地域開発計画から貧困緩和

82) クマールは典型的な事例として、ランヴィール・セナーに対するブミハールの政治的庇護を調査することを目的として設置されたアミール・ダス委員会を、ニティッシュ政権が廃止したことを挙げている [Kumar, A 2008: 89].



- 事業へ』『アジア経済』XXXIX-7 (1998.7) : 22-52.
- サルカール, スミット. 1993. 『新しいインド近代史 I・II 一下からの歴史の試み』長崎暢子・白田雅之・中里成章・栗屋利江訳, 研文出版.
- スコット, ジェームズ・C. 1994. 「日常型の抵抗」坂本義和編『世界政治の構造変動 3 発展』藤原帰一訳, 岩波書店, 149-192.
- 竹中千春. 2005. 「グローバリゼーションと民主主義の間—インド政治の現在」『国際問題』542: 7-23.
- . 2009a. 「盗賊のインド史 (一) —近代国家の周縁」『立教法学』76: 67-121.
- . 2009b. 「盗賊のインド史 (二) —近代国家の周縁」『立教法学』77: 182-293.
- 中里成章. 1989. 「ベンガルにおける土地所有権の展開」『歴史と地理』402: 1-14.
- 中溝和弥. 2008a. 『暴力の配当—インド・ビハール州における政治変動とアイデンティティの政治』(2008年3月 東京大学大学院法学政治学研究科提出博士論文 未刊行).
- . 2008b. 「第7章 インドにおけるナクサライト研究」近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ—多党化と経済成長の時代における安定性と限界』(調査研究報告書), アジア経済研究所, 249-276.
- . 2009a. 「第9章 暴力革命と議会政治—インドにおけるナクサライト運動の展開」近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ—挑戦と変容』アジア経済研究所, 355-401.
- . 2009b. 「暴動と政治変動—インド・ビハール州の事例」日本政治学会編『年報政治学 2009-II』木鐸社, 150-177.

#### 外国語文献

##### (1) 新聞・雑誌記事

- India Today*. 1990 (March 31). No one dare topple me.
- Ramakrishnan, Venkitesh. 1999. A history of Massacres, *Frontline* March 12: 30-31.
- Sengupta, Uttam. 1997 (April 23). Police appear helpless to curb violence in Bihar, *Times of India* (Mumbai).
- Singh, Abhay. 1997 (April 12). Extremist groups in Bihar battle for supremacy, *Times of India* (Mumbai).
- The Times of India* (Bombay). 1994 (October 6). Naxals, Landlords clash in Bihar.

##### (2) 調査報告書

- Patnaik, B. N. 1990. *Harijan's Franchise: An Alibi of Class Conflict (A Case Study of Dhanwar-Bihra Masacre)*, Patna: Harijan Study Centre, A. N. Sinha Institute of Social Studies.

##### (3) 二次文献

- Bharti, Indu. 1990. Dalits Gain New Izzat, *Economic and Political Weekly* (以下, *EPW*) May 5-12: 980-981.
- Bhatia, Bela. 1997. Massacre on the Banks of the Sone, *EPW* December 20: 3242-3245.
- Bhushan, Shashi. 1977. The Belchchi Killings, *EPW* June 18: 974.
- Blair, Harry Wallace. 1980. Rising Kulaks and Backward Classes in Bihar: Social Change in the Late 1970's, *EPW* January 12: 64-74.
- Brass, Paul R. 1994. *The Politics of India since Independence* (second edition). New Delhi: Foundation Books.
- Chandra, Kanchan. 2004. *Why Ethnic Parties Succeed: Patronage and Ethnic Head Counts in India*. Cambridge: Cambridge University Press (South Asian edition).

- Chaudhry, Praveen K. 1988. Agrarian Unrest in Bihar: A Case Study of Patna District 1960-1984, *EPW* January 2-9: 2-9.
- Choudhary, P. K. and Srikant. 2001. *Bibār mem sāmājīk pari-vartan ke kuch ā-yām (1912-1990)*. (in Hindi) [Some Aspect of Social Change in Bihar] Patna: Vani Prakashan.
- Chhibber, Pradeep K. 1999. *Democracy without Associations: Transformation of the Party System and Social Cleavages in India*. New Delhi: Vistaar Publications.
- CSDS Team. 1999. Sharp Polarization in Bihar, *Frontline* November 27-December 10: 36-38.
- Das, Arvind N. 1983. *Agrarian Unrest and Socio-Economic Change in Bihar, 1900-1980*. New Delhi: Manohar Publications.
- Frankel, Francine R. 1990. Caste, Land and Dominance in Bihar: Breakdown of the Brahmanical Social Order. In Francine R. Frankel and M. S. A. Rao eds., *Dominance and State Power in Modern India: Decline of a Social Order*, vol. I. Delhi: Oxford University Press, pp. 46-132.
- \_\_\_\_\_. 2005. *India's Political Economy, 1947-2004: The Gradual Revolution* (second edition). New Delhi: Oxford University Press.
- Gupta, Shaibal. 2001. New Panchayats and Subaltern Resurgence, *EPW* July 21: 2742-2744.
- Hobsbawm, Eric. 2000. *Bandits*. New York: The New Press.
- Jaffrelot, Christophe. 1996. *The Hindu Nationalist Movement and Indian Politics 1925 to 1990s: Strategies of Identity-Building, Implantation and Mobilisation (with special reference to Central India)*. New Delhi: Viking.
- \_\_\_\_\_. 2003. *India's Silent Revolution: The Rise of the Low Castes in North Indian Politics*. Delhi: Permanent Black.
- Kohli, Atul. 1992. *Democracy and Discontent: India's Growing Crisis of Governability*. New Delhi: Foundation Books (Indian edition).
- Kumar, Ashwani. 2008. *Community Warriors: State, Pesants and Caste Armies in Bihar*. New Delhi: Anthem Press.
- Kumar, Sanjay. 1999. New Phase in Backward Caste Politics in Bihar: Janata Dal on the Decline, *EPW* August 21-28: 2472-2480.
- \_\_\_\_\_. 2000. The Return of the RJD, *Frontline* March 31: 27-30.
- \_\_\_\_\_. 2009. Bihar: Development Matters, *EPW* September 26: 141-144.
- Louis, Prakash. 2000. Class War Spreads to New Areas, *EPW* June 24: 2206-2211.
- \_\_\_\_\_. 2002. *People Power: The Naxalite Movement in Central Bihar*. Delhi: Wordsmiths.
- Majumdar, P. K. and Kataria, R. P. 2004. *The Constitution of India*. New Delhi: Orient Publishing Company.
- Mukherjee, Kalyan and Kala, Manju. 1979. Bhojpur: The Long Struggle. In Arvind N. Das and V. Nilakant eds., *Agrarian Relations in India*. New Delhi: Manohar Publications, pp. 213-230.
- Nigam, Aditya and Yadav, Yogendra. 1999. Electoral Politics in Indian States, 1989-1999, *EPW* August 21-28: 2391-2392.
- Pathak, Bindeshwar. 1993. *Rural Violence in Bihar*. New Delhi: Concept Publishing Company.
- Prasad, Pradhan H. 1987. Agrarian Violence in Bihar, *EPW* May 30: 847-852.
- \_\_\_\_\_. 1989. *Lopsided Growth*. Bombay: Oxford University Press.
- Rudolph, Lloyd I. and Rudolph, Susanne Hoeber. 1998. *In Pursuit of Lakshmi: The Political Economy of the Indian State*. New Delhi: Orient Longman (Paper back edition).
- Roy, Ramashray. 1991. Caste and Political Recruitment in Bihar. In Rajni Kothari ed., *Caste in Indian*

- Politics*. New Delhi: Orient Longman (first published in 1970), pp. 228-258.
- Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.
- Singh, V. B. 1995. Class Action, *Frontline* June 2: 100-102.
- Srikant. 1995. *Bihar Main Chunav: Jaati, booth loot aur hinsa*. Patna: Sikha Prakashan. (in Hindi) [*Election in Bihar-caste, booth loot and violence*].
- \_\_\_\_\_. 2005. *Bihar Main Chunav: Jaati, hinsa aur booth loot*. New Delhi: Vani Prakashan. (in Hindi) [*Election in Bihar-caste, violence and booth loot*].
- Yadav, Muneshwar. 2004. Bihar: Politics from Below, *EPW* December 18: 5510-5513.